

創刊五〇号記念エッセイ集

キリスト教社会問題研究会と私

「底辺社会」研究のはじまり

秋 定 嘉 和

私が人文研の「キリスト教社会問題研究会」とかわりをもった当初のことを思いだそうとするが四〇年近い歳月がたちおぼろげな記憶しかない。当時、立命館大学の修士（一九五八〜六二年）のときで論文のテーマがきめかね迷った状況にあった。いろいろと「資料さがし」がはじまり、京都大学の人文科学研究所の渡部徹先生のもとへたずねた。このとき紹介されたのが高屋定国さんで、研究室？を訪ねると来客があり、あとで聞くと神山茂夫さん、あるいは小山弘健さんで、いまになるとわからずじまいであった。高屋さんは親切に対応してくれ、その後もときたましかあわないが親交がつづいている。

この時期、京都の学界では、人文研のハーバード援助による日本の社会資料蒐集は反米感情がつよいなか話題になっていた。いづぞや竹中正夫さんのご報告では一九五九年からの十五年間、計四、四四五万円の援助があったといわれた。一ドルが三六〇円で、しかも当時の物価からみて大変な額であったと思われる。

私は大学院修了後、父が死亡、家業をついで数年後、高校教師となった。そのとき、同志社で部落差別事件があり、大学は知的責務の一端をはたすべく人文研に部落問題の関連資料の蒐集につとめられた。このころ私は、ある二人の友人（一人は同志社大神学部、一人は立命館大法学部に入学）のつらい思い出に接し、半生の勉学のテーマとして「被差別部落史」に存念をおいたときであった。

このとき、同志社の人文研での部落問題文獻利用と蒐集への協力がはじまるのである。一九七〇年前後のときであった。親しくしていただいたのは太田雅夫さんで、まだ桃山学院にいかれる前であった。このときの蒐集体験が身についたのか、いまでも暇になると全国の研究機関や図書館をまわっている。このような私の一生を左右する仕事の端初を与えてくれた人文研に感謝するところは大きい。

ついで、人文研の「研究会」参加のときの思い出をのべてみたい。私は「キリスト教と日本社会」の班に入れていただいたが、これも記憶が定かでない。一九九〇年前後に

二文を草しているの、その前を数えると十数年前かと思う。私はキリスト教が日本社会に与えた影響とか役割に関心があり、とりわけ底辺社会との関係（被差別部落、貧困者、娼婦）に焦点をあてていた。しかし、校務など多忙となり会の出席もままならず、論文提出の責任も果さず恥かしい晩年になってしまった。

（池坊短期大学教員）

開かれた研究会に参加して

土肥 昭夫

キリスト教社会問題研究会（CS）が一九五九年に人文科学研究所の一研究会になったとき、私はその会員になった。その前年まで米国に留学していた私は、自らのキリスト教を直視する必要を覚えていたので、この研究会で日本プロテスタント・キリスト教史を研究することにした。処女作『内村鑑三』（日本基督教団出版部、一九六二 六版を重ねる）執筆のとき、CSの書庫に入り、『内村鑑三著作集』第十八巻に収められた鈴木俊郎氏の英文書簡名訳を読んだときの感動は、今も忘れ難い。

一九七〇年代以後、大学の行政に対する疑惑と不信のためにこれに関係することは極力避け、六九年末に学生諸君に宣言したように、自らの研究と教育に専念した。神学研究所において私のゼミに参加した学生諸君が、八〇年代より十数年にわたり交互にCSの研究補助者として会の運営に尽力するのみならず、修士論文、博士論文の作成にCS資料をも十分活用されたことは、喜ばしい限りであった。

その頃、新聞の復刻やその総目次の刊行で著名な日本図書センターがキリスト教新聞・雑誌のマイクロフィルム版刊行を企画し、人文研に協力を求めてきた。私はその企画や販売にいろいろ助言した。一九九二―九五年に三期にわたって刊行された『近代日本キリスト教新聞集成』（全一七三リール）について、この方面に詳しい立教大学教授の鈴木範久氏が「空前の大企画」、「教会の歓声と吐息が聞こえてくる」（『本のひろば』一九九二・一〇）と述べられた。その言辞には共感できるだけに、感無量であった。私は日本の教会と神学の歴史研究に重要な紙誌である日基系の『聖書の研鑽』、『福音と現代』、『みくに』、『信仰と生活』、『組合系の同志社文学系別誌』、『社会的基督教』、『フレンドの愛の友』、『友』、『基督教連盟の『基督教聯盟』、『聯盟時報』、『日本基督教団の『教團時報』、『YMCA同盟の『開拓者』、『一般キリスト教誌の『新興基督教』が復刻されず、しかもそれらが人文研、神学部、YMCA同盟に所蔵されているので、第四期の企画を立てるように提案したが、これは実現しなかった。しかし日本図書センターは主要新聞の総目次を人文研の監修で『キリスト教新聞記事総覧』一〇巻として九六年に刊行した。私は当時専任研究員であつ

た吉田亮氏と協力し、四七名の目次作成者にその執筆要領を指示し、五名の研究者に解説を依頼し、みずからもその序文を寄稿した。収録された一四新聞を読めば、日本プロテスタント・キリスト教の大勢を知る資料を提供したことになる。この総目次は「高峰の登攀にひとしい難事業」（鈴木範久氏）、「資料の宝庫への道案内」（京大名誉教授松尾尊兌氏）と推賞された。

一九八九年に人文研第一研究CSは「近代天皇制とキリスト教」を課題として掲げた。天皇代替わりの騒音の中でこの課題を歴史的に検証するためであった。戦時下に旧制中学校、大学予科で学業生活をした者にとって天皇制は怨念の的であり、戦後キリスト者となった者にとってなぜ天皇制がキリスト教を包摂していったかは深刻な課題であった。すでに「三教会同」（『キリスト教社会問題研究』一九六七、六九）、「天皇制とキリスト教」（『福音と世界』一九七八・二一四）、「天皇制形成期のキリスト教」（『社会科学』人文研、一九八二）などでこの問題を論及していたので、この研究会に参加した。その成果は田中真人氏との共編著『近代天皇制とキリスト教』（人文書院、一九九六）に明らかである。追隨であれ、躊躇であれ、抵抗であれ、

その多様な生き方の基底にひそむキリスト教の体質を問うことが、私の念願であった。

一九九二年に人文研は「日本におけるキリスト教の受容と教派・教会の展開」を第二研究として認めた。かねてより、私は日本の諸教派の動向については『日本プロテスタント教会の成立と展開』（日本基督教団出版局、一九七五）を論文集として刊行していたので、この研究会に参加した。日本の教派については、石原謙氏、熊野義孝氏のようにその未熟さ、曖昧さを高踏的に見おろすのではなく、たといそのような側面があつたとしても、日本の地域社会に生きるためにどのような活動、組織づくりをしていったかを丹念に研究し、そこから未発の可能性を引き出すことが、私の念願であつた。また、その「まえがき」に述べたように教派研究が宗教社会学的研究と神学的研究をつなぐ一つの方法であると考えていた。『日本プロテスタント諸教派史の研究』（教文館、一九九七）はその成果である。論文として提出されなかったが、その研究報告によつて在日大韓基督教会の苦渋に満ちた足跡を論及された李清一氏の参加は、有意義であつた。本書は好評で三版を重ねた。

これらの仕事を終えた私は、一九九七年三月の定年退職

と共に人文研の兼担研究員を辞めることになった。しかしその後は嘱託研究員としてCS研究会に参加している。自由で開放的な、この研究会との関係は、私の研究活動が続く限り、なくならないだろう。人文研の教職員各位のご厚情には感謝のほかはない。

啓明館の杉井六郎研究室から

葛 井 義 憲

同志社大学人文科学研究所の研究補助者制度が発足したのが一九七四年四月からであった。

私はこの月、同大学大学院神学研究科博士課程に入学し、人文科学研究所のキリスト教社会問題研究の研究補助者となった。神学研究科と人文科学研究所。若い私には、新鮮な魅力ある世界、新しい何かが生まれるような予感をもたせるような所であった。

人文科学研究所で、私を指導して下さるのは杉井六郎先生。先生は啓明館の先生の研究室を自由に出入りさせて下さった。旺盛な研究活動と、丁寧な教育活動を行っておられる先生の下へ、前触れもなくやってくる私。そしてそこで、ある時は先生に質問をし、ある時は私の仕事の一つであったアメリカン・ボードの書簡のマイクロフィルムのカード化（差出人と受取人の名前の記載）に取りかかった。先生が現在、何をしておられるかも考えず、こちらの都合で、「傍若無人」に振る舞う小生。大変、迷惑されたこと

だろうと思う。

先生について、キリスト教社会問題研究の研究会に参加した。諸先生方の真摯な研究への取り組み、白熱した議論のやりとりの場に身を置くと、「研究者とはかかるものなのだ」ということを知らされた。新鮮な驚きであった。それとともに、篠田一人・高橋虔・和田洋一・嶋田啓一郎・今中寛司などの老先生方の博学に触れることも嬉しいことであった。さらに、学外から熱心に研究会にやってこられる佐々木敏二・村山幸輝先生たちと言葉をかわすのも楽しいみなことであった。杉井先生を媒介にして、色々な方々と交わることができた。

啓明館の杉井研究室は今思うと、あらゆる人々に開かれた所であった。常連の研究会参加者だけでなく、これから研究者として育っていく若い大学院生たちにも開かれていた。留岡幸助研究に取り組みだした室田保夫さんや田中和男さん、山路愛山研究に熱心であった山本幸規さん。これらの人々も杉井研究室を熱心に訪ね、教えを請うていた。そしてこの開かれた杉井研究室こそが人文科学研究所キリスト教社会問題研究の研究姿勢を如実に代弁するもののように思われる。

私は、一九七九年、神学研究科博士課程を修了して、東京へ赴き、それ以後、人文科学研究所とは疎遠になった。

しかし、私の杉井研究室Ⅱ人文科学研究所キリスト教社会問題研究での日々は曲がりなりにも、現在、教育者として、研究者として歩む上での大きな力となっていることは間違いない。とりわけ、あの時の杉井先生の背中中、今教育者として学生と過ごす私に多くのことを教えて下さる。最後に、若き日に多くのことを学ばせて戴いたキリスト教社会問題研究が益々発展して、この世に大いに寄与されることを祈ります。

(名古屋学院大学経済学部教授)

C・Sで進めた私の研究

萩原俊彦

一 始めに

一九五七年私は大学三回生、卒業論文準備に入る。指導教授秋山国三先生にテーマを申すと、近代史専攻者は、C・Sを利用し、仲村研氏の許婚、山本明子嬢を頼れとガイダンス。これが、C・Sを耳にした始めである。尋ると、図書館裏の最上階に、山本嬢などアルバイト二名が勤務、経理事務と資料整理を分担していた。また研究所では高屋定国氏が常勤職員として、C・Sなどの業務を担当していた。私は数回ここを訪問、文献資料を借用した。当時は県議会図書室などより、文献資料は僅かであった。これで、大同志社の個性豊かな研究が推進出来るとは思えない。しかし、メンバーは島田啓一郎・住谷悦治・篠田一人・田畑忍・和田洋一それに小倉襄二・竹中正夫・杉井六郎、笠原芳光、前記高屋の諸氏がおり、同志社の知性を誇っていた。当時、C・Sを僅かに知る左派の学生にとり、人気の高い

人物は高屋氏であった。三月書房で京都現代史研究会を主催する同氏に学生の関心は集まり、記念講演会に小山弘健・井上清などを招くと前座や司会を担当された。同氏の活動を介してC・Sの存在は認識されていた。

二 大学院時代と研究所・C・S

一九五九年大学院入学、以来暫時C・Sとの交際が始まる。一年次、秋山ゼミは第三研究を兼ね、封建村落研究を進める。ここで、近代史研究に関する根本史料の収集が話題となり、群馬県庁所蔵、秩父事件暴徒尋問調書のマイクロ保存が話題となり、C・Sに相談、委員長住谷悦治先生らの賛同で、保存決定、住谷家所蔵『筵旗群馬の嘶き』もマイクロ化する。秋山・井ゲ田先生と群馬県庁で落ち合い。萩原進群馬県議会図書室長の好意で、作業開始、お茶の水の「日本マイクロ」が作業を担当、私は一週間のお付き合いです。その間、群馬町の住谷家で、実母軟さんと対面。程なく修士論文はこの史料で作成せよとの指導を戴く。体系だった秩父事件史料はC・Sが全国で最初に収納した。残念なのは私以後、貴重な史料を駆使した研究論文が発表されていない。これでは、根本史料に弱い研究機関との誇りは

免れまい。なお当時は京都大学でも、近代史料が乏しく、松尾尊よし氏がしばしば来訪。阪大名誉教授田田昌希さんが私を介して『福沢全集』の閲覧に來られたのもこの項のことである。一九六〇年秋、大学院政治学専攻の太田一男（後に酪農学園大学）さんとアルバイト。仲村さん佐々木敏二さんの後任である。盛口憲二事務長の指示で仕事を進める。委員長は篠田先生、確か二冊の研究誌の編集を手伝ふ。『熊本バンド』と『内村研究』であろうか。さらに記念講演会の裏方を二度担当。モスクワ東洋学会参加住谷悦治・同申一・高屋定国三氏の講演。その前後に熊本バンドの講演会を開催。C・S研究会の本領を理解する。博士過程の一年次も、研究所のアルバイトで過ごし、数カ月はC・S。「佐々木時代」である。二度のC・S体験で感じたことは、食事の会が多かったこと。会員、役員、職員相互の連帯感、福音書通り、共食体験を介して養われた。委員会には、オブザーバーとして出席。知名度の高い先生の脇に座るだけでも感動を覚えた。C・Sへの出入りはこの後も継続。ここを窓口山本宣治研究会が発足。史料再訪と例会、「復活山宣祭」を企画。山宣祭の委員長として挨拶をする。やがて山宣記念室が花屋敷に出来。性教育研究

者小田切明徳さんも育っていった。この後、一九六九年、七〇年と梅花学園資料室、沢山保羅研究会囑託、佐野安仁・茂義樹・遠藤とも三先生と梅花からC・Sに協力、篠田・杉井先生と共同研究会を開催。どなたもよく調査にでられた。汗を流して調査をし、得難い史料を収集する研究スタイルは、篠田・杉井両先生により確立された。

三 社員として現在まで

一九七三年入社、C・Sのどの部会も活発。松本平研究に次ぎ、上毛研究との声があがり、基礎調査に赴く。一九七四年に笠原芳光氏ら三名で安中方面調査、軽井沢のペテルハウスで桜井乾一郎夫妻と対談。上毛教界月報廃刊当時の模様をテープにとりC・Sに納めた。未だ活字化せぬのが気掛かり。此のとき、桜井氏の娘の嫁ぎ先に『新生命』があることを聞き借用する。これで、『月報』は完全に揃った。翌年の調査はフィールドが主。しかし、笠原氏が岩井文男先生より柏木書簡を借用、複製化に成功、初の戦果を上げた。七六年から二年をかけて、原市教会史料・柏木家史料の調査、借りだしを実現。七七年には杉井先生・着任間もない田中先生も参加。七八年には松井家の家蔵文書

の調査に入る。なお七七年・七八年は松井家に宿をとり、松井七郎先生の甥・松井愛一さんに、柏木義円の回想を語って貰ふ。文献では解せぬ柏木の実像を共有財産とした。七七年以来、放課後毎晩、今出川へ。女子大を作業場に、柏木義円関係史料整理、カード作成、七八年秋に完成。これの、マイクロ化も程なく完成、C・Sの財産となる。柏木義円関係史料の宝庫が出来た。その後、高崎教会関係史料も複製保存が出来、上毛教会研究の準備は略完成、後は、渋川、沼田、桐生・桐生無教会・桐生組合などの教会史料収集などが課題となるであろう。その後、安中・柏木家、富岡・松井家などのコンタクトは、偶然にか、必然にか、実質私が担当している。この夏、久々に安中訪問、ペーケン啓子、柏木清さんを見舞ふ。二七年前にC・Sより旅費を戴き、安中を尋ねた頃、古稀を迎えて間もない清さんは既に九八才。私の声を聞いて「萩原先生」と言われたのには驚いた。ご厚意に報いるため、湯浅・柏木・新藤・松井・半田を輩出した安中教会とその背景をなす地域社会の共同研究を復活させねばなるまい。筑波大学名誉教授大浜徹也さんもそのことを激励された。

研究の基を学ぶ場としての キリスト教社会問題研究会

畠 中 暁 子

私が、同志社大学人文科学研究所のキリスト教社会問題研究会に参加させていただいたのは、一九九七年からの事になる。それまでは、同志社大学大学院の社会福祉学専攻で小倉襄二先生にご指導頂き、社会事業史関連の研究会にも参加させて頂きながら、ともに自分の視点が形にならないまま・闇雲にあちこちに頭をぶつけながらも、勉強を続けさせて頂いていた。

しかし、キリスト教社会問題研究会に参加させて頂き、石井十次研究班において石井十次の膨大な日誌や彼の岡山孤児院での取り組みへの研究を行っていく際、一つの問題に関わるときの資料の重みやそれらを蓄積していくことの大切さ、そして蓄積したものを組み立てていく（ここにその人の創意工夫や独特の視座が表れて、とても面白いのだが）——という「研究をしていく」ことの基本を改めて学ばせて頂いたし、現在でもそれは続いている。また、研究の

蓄積や独自の視点を積んでいくに当たって、「基本的な共通理解」を確認し大切にしていくことも当然のことだが、学ばせて頂いた。

こうして記すのは簡単なことであるが、これらの事はいずれから自分の研究の方向性をつくっていくのに必要なことでありながら、現在目前に存在する諸々の社会問題に取り組むときに疎かにしていたり見過ごしにしたりしていた部分である。特に、優生思想や障害者福祉の問題、女性の問題などに関わり学んでいくとすると、そのような部分を目の前に突きつけられている事に気づきにくい。先に記したような基礎を自分の中に培っていないと、突きつけられた問題を狭い視点でしかとらえられないし、硬直化もしてくる。

研究会という場で得たこと、そして様々な人たちとの関係で得たことが、「その問題に取り組むことの重みや問題をとらえる柔らかさを感じ育てていくこと」として、最近になって自分の中に少しずつ定着しつつある実感を得ている。今後、この実感を大切に、社会問題も含む人の営みをもっと広く深く見つめていきたいと考えている。

主婦から研究者へ

——私を支えてくれた研究会によせて——

今井小の実

初めて人文科学研究所の存在を知ったのは、同志社の文学研究科博士前期課程に入学してまもない七年前の春のことであった。子育てをしながらパート勤めをしていた生活とは一八〇度の転回で、若い同期生たちと社会福祉について学びはじめた私は、果たしてこの選択が正しかったのか、未知の荒波に船をこいでいくような心細さを感じていた。

学問から離れて一〇年以上の歳月がたっていた。教授たちの口から出てくる専門用語がわからず、若い仲間たちが闊達な意見を交わす様子を気の遠くなるような思いで眺めていたころであった。それでも逃げ出したくなかった。子育ての経験が社会福祉で歩みたいという強い気持ち育ててきたし、三三歳の時に出会った阿部謹也の中世ヨーロッパの民衆史の研究が心を捕らえて離さなかったからである。そんな時、小倉襄二先生から人文科学研究所の名前をお聞きした。それは社会事業史の講義中のことであり、研究の

ために専門的な文献が必要になったら行きなさいという内容のことを言われたと思う。そして「紹介するから」と、そのあとに先生はつけ足されたのである。この日から、人文科学研究所は私にとって教授の紹介なしでは立ち入り不可能な学問の聖堂になった。

二年後、私は博士後期課程の学生として人文科学研究所のキリスト教社会問題研究会に参加していた。その年、小倉先生は同志社を退官され新島学園の学長に就任、遠く群馬の地に行かれることになった。残された畠中さんと私のために、田中真人先生に紹介下さったのである。それから数年、田中先生は、小倉先生に頼まれたからだとおっしゃりながら、本当によく二人の面倒を見てくださっている。新たに指導教官を引きうけてくださった先生が、人文研での研究活動に理解を示して下さり、学問的に寛容な姿勢で見守って下さったのも幸運であった。

最初に取組んだのは、石井十次の日誌をデータベース化する仕事であったが、まだ小学校低学年の二人の子どもを抱えていた私にはつらい作業であった。茶の間で全てが完結するような生活を送っていた頃で、夫と子どもが寝静まつてからの深夜の作業になることもあった。またメンバ―

たちが集積した膨大なデータを『石井十次の研究』のなかに収める作業では、期日が迫り、実家に帰省した時でさえパソコンが放せず、一室を作業用に占領して日誌とデータの間で格闘したこともある。しかし、現在の研究の原点にはあの時の経験がある。私は、小さな時から神経質といわれる一方で、大胆で大雑把な一面をもっており、ひらめきで行動してしまうようなところがあった。そのため自分が研究者になった時にはそれが災いするのではないかと漠然と不安に思っていた。実際、修士論文を執筆する際にも、熱い「思い」のようなものが先走り、実証は後手になるようなところがあった。キリスト教社会問題研究会での地味な作業の経験と、先生方の精緻な研究に基づいたご報告の数々は、その後の研究の指針でもあり目標になっている。

社会福祉の重鎮、一番ヶ瀬康子先生は、社会福祉学を学ぶには「熱い胸」と「冷たい頭」の両方が必要だと言われたが、私は社会福祉の先生方から対象者に寄り添う「熱い胸」をもつことの大切さを徹底的に教えていただいた。そしてこの研究会において社会事業史、思想史を極める実証方法、つまり「冷たい頭」の部分を鍛えて頂いたのだと思っている。人文科学研究所でのこの研究会との出会いがな

ければ、おそらく三〇代半ばにして遅いスタートを切った私に、大学の教壇に立つ機会はめぐってこなかったと思う。しかし新設の短大に所属するということは、研究者ではなく教育者としての自覚と行動を強く求められることである。研究する時間がほとんどなくなった現状にあつて、第一、三金曜日の研究会にせめて月に一度は出席することを自分へ課している。愛する同志社に足を運び、その季節ごとに変わるキャンパスの表情を楽しみながら研究所に向かう時、母校との絆を深めてくれるキリスト教社会問題研究会の存在に心から感謝するのである。

(大阪体育大学短期大学部)

キリスト教社会問題研究会に出入りして

伊 藤 彌 彦

一九七三年同志社に入社した直後から、この研究会に深からず浅からずの断続的關係を続け、その間数回専従研究員としての恩恵に預かる幸運にも恵まれて来た。日本近代思想史を専攻する自分としては、人文研は資料の宝庫である。といってこの資料と積極的に格闘して研究を積んだという訳ではない。私にとってその意味は、何か論文を書いたり読んだりしていて、全く心当たりのない無名の作品などに目を通してなることがある。その時、意外にも人文研が所蔵していて簡単に借り出せた経験が重なっているからである。戦中・戦後直後パンフレット類を含めよくぞこれだけ収集したものだと思う。

研究部会のなかでも宣教師文書を読む部会などは、地道で少数ながらきわめて学問的に充実しており、知的意欲を触発される気持ちのよい研究会なので時間の都合がつく時は陪席させていただいている。

それでいて、深からず、というのは第一に本務学部の授

業等数が多く忙しすぎるためである。月一度の研究会の報告準備を考えると足がひく。部会によっては似た顔触れでマンネリ化が見られなくもない。人文研専従研究員制度は、すばらしい構想であるが、実際のところ規定通りに、それを理由に本務学部の講義数を四コマに減らすことは気がひけて出来ない。むしろ国内研究をとった時に一年間人文研究所を足場に研究に集中するほうが迷惑をかけないと思ったりしている。それを生かせる一年という研究期間の設定や、必ずしも共同研究でない個人研究として身をおける制度もあってもいいのではないだろうか。

同じ建物にある社史資料室は内容的に人文研と非常に近いので、統合した方が双方に有益であると考えてる。

(同志社大学法学部教授)

実証から想像へ

笠原芳光

キリスト教社会問題研究会において学んだものは、なによりも実証主義である。

研究に際して資料、それも可能な限り原典、あるいは第一次資料を丹念に読み、調べ、それをもとにして論文を書く。この基礎的な作業が最も大切であることを教えられた。このような実証的方法、そして実証主義が学問研究において必須であることはいうまでもない。

だが、ここであえて言いたいのは、そのような実証主義だけでよいのか、ということである。実証的方法は研究の基礎としては不可欠であるが、それは研究の全体ではない。およそ基礎は確実なもの、その研究成果は論理的かつ体系的でなければならない。

しかし、それだけで全体をあらわすことはできない。全体には不確実なもの、曖昧なもの、感覚的なものも含まれている。それらを実証的方法によってすべて客観化してしまつたら、全体としての生命は失われる。

客観と同様に原作者の、そして研究者による主観的なものが含まれていなければ、真理の総体をあらわすことはできない。もとより真理の総体をわれわれは表現しえない。だが、それにいささかなりとも近づくことはできる。

およそ研究論文なるものの多くは無味乾燥である。それを読んで知的興奮を覚え、想像力を喚起させる論攷はすくない。よくわかるだけでなく、感動をもたらし、連想をよび起こしてくれるものは稀である。

たとえばキルケゴールやニーチェの著作はおもしろい。深い。刺激的である。だが彼等の研究者が記した論述において、研究の対象は過去の人になってしまっている。その研究のなかで生かされていない。二重の意味で死んでいるのである。

それはなぜか。キルケゴールやニーチェは詩人哲学者であつた。だが、それを研究する者のほとんどは哲学者であるとしても、詩人ではない。すくなくとも詩精神が欠如しているからである。そのことをこの国においていうなら、詩人思想家である北村透谷や吉本隆明に関する研究についても同断である。

いま透谷に言及したついでに言うなら、透谷と山路愛山

の有名な論争がある。愛山は「頼巽を論ず」という頼山陽論において、「文章は事業である。それは人生に相渉らなければ空の空なるものだ」という趣旨をのべた。

それに対して透谷は「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を書いて、ただちに反論し、「文章は事業ではない。人生に相渉らずともよい」として「愛山生には空の空を撃ちたりと言はれんも、空の空の空を撃ちて、星にまで達せんとせしにあるのみ」と断言した。山路愛山は歴史家として実証主義の立場であり、それを北村透谷は詩人として駿撃したのである。

このことはまたアカデミズムとジャーナリズムという問題にも連鎖する。およそアカデミズムはもっぱら学問研究を推進するものであり、真理の探究、バルザック風になら絶対の探究である。ジャーナリズムはジャーナルが「日々の」という意味を有しているところから言つて、日常の社会や文化の事象、すなわち相対の究明である。

かつて、この両者は乖離し、あるいは反目していた。しかし近年、ともに自らがすべてではない、真理の総体をあらわしてはいないと思うようになったのか、両者のかかわりを図り、総合をもたらしとする動きがあらわれてきた。

それは、いわば客観と主観、実証と想像、さらには永遠と現在の関連という問題でもある。

既往のアカデミズムはもっぱら難解であつた。そして従来のジャーナリズムはただおもしろいだけであつた。その両立をはかることは難しい。およそ日本の近代においてアカデミズムとジャーナリズムを等量に考察し、論評した者は稀有である。

あえていえば大西祝であらう。大西は同志社の生んだ最高の逸材といつても過言ではない。開明的な哲学者であり、『六合雜誌』の編集者でもあつた。哲学、論理学、心理学、美学、文学、社会思想など多分野にわたる批判的研究者、さらにすぐれた教育者であり、文学者であつた。ただ短命が惜しまれる。

それに次ぐのは三木清であらう。西田幾多郎の高弟として観念論の哲学を探究、マルクス主義や宗教にも新しい視野を開き、『人生論ノート』など平明な書も著した。治安維持法に触れての獄死が無念である。さらにあげるなら『共同幻想論』と『マイナスイメージ論』の吉本隆明であるが、残念ながら紙幅がない。

ともあれ、このアカデミズムとジャーナリズムの総合は

同志社大学人文科学研究所が、これまでの研究活動を革新するための課題ではないか。実証主義に基づきつつ、万人に感動と刺戟と想像力をもたらす果敢なる研究を遂行するために。

(京都精華大学名誉教授)

C・Sがクラーク記念館にあったところ

宮澤 正典

C・S入会の切っ掛けは『丁酉倫理会倫理講演集』だった。高道基先生と話していたとき、その雑誌に言及すると、「それならC・Sにある。会員になれば自由に閲覧できる。入会推薦者にもなる」とことが運んだ（そのころは推薦者が必要だったのかどうか）。一九六六年のことである。なぜ『倫理講演集』なのか。元来イギリスへのユダヤ人再入国のことをいささか勉強していたが、ドイツ・ユダヤ史専門の恩師菅原憲先生から「日本にも大正時代から反ユダヤ論議があつた」ことを教えていただいたことから、雑誌でその論議をあさり始めていたが、『倫理講演集』だけはまだ見る機会がなかったからだった。

それからのクラーク記念館入口の階段を登って左のC・S書庫通いは発見の日々であつた。トイレも他の建物に行かなくて入口の左にあることを教えてもらった。

当時の研究プロジェクトは和田洋一先生が代表の「戦時下抵抗の研究」であつた。研究会は書庫の奥の社史事務室

の書架で区切られた北西隅の一面であった。そこはそれまで私の知っていた、取り澄ました学会や教授、先輩のコメントを承る雰囲気の研究会とはまったくちがっていた。会員の何と自由な発言、そして和田先生の元氣と包容力に魅かれて末席に加えてもらっていた。ここでは、さきのユダヤ問題論議探索のなかで出会っていた外交評論家清沢冽の抵抗をとりあげて『戦時下抵抗の研究』第二巻（一九六九年）に載せてもらった。これが最初でその後C・S叢書には多分七冊に寄稿させてもらった。

それらのうち最も印象に残るのは、信州穂高の研究義塾出身の清沢冽が導き手となった『松本平におけるキリスト教』（一九七九年）に結実するプロジェクトである。一九七〇年夏以降何回もの現地調査にご一緒した竹中正夫・杉井六郎・篠田一人・太田雅夫・土肥昭夫・平林一・郡定也の諸先生をはじめ、現地の方々との交わりが思い出されて懐旧しきりである。一九八〇年五月には出版記念講演会を穂高町民会館で開催した。じつは間をおいて二〇〇一年六月、穂高東中学校開校記念講演を依頼されて「万水川の水脈―研究義塾の人びと―」を語るなど、今もC・Sの研究プロジェクトが生きている。

さて、クラーク記念館に入って左側のC・S書庫と社史事務室をこえて、やがて右側奥の同志社社史資料室の資料書庫にも入らせてもらうようになったのは何が切っ掛けかとは思いつけないが、多分C・Sというチャネルなしにはなかったのではないか。その後『同志社百年史』（一九七九年）編集にかかわらせてもらうようになったのも、そういう文脈上のことだったのではないだろうか。いつのまにか私の研究テーマのひとつとなっている同志社女学校史研究というのもC・Sと繋がっていたかもしれない。まだ元氣のあるうちに同学の先生方とそれをまとめあげることによって、C・Sに加えてもらって実に沢山の恩恵をえてきた何冊目かの本にして、C・Sへの鳴謝をあらわしたいと思っているのだが。

（同志社女子大学特任教授）

人文研的な生き方

本 井 康 博

同志社大学人文科学研究所、いやキリスト教社会問題研究会と言えば、まず「熊本バンド」である。

このテーマをめぐって最初の公開講演会が同志社大学（明徳館）で開催されたのは一九六〇年二月二日であった。当時、岩倉（同志社高等学校）の三年生であった私は、この日、下校途次に同級生の口から「熊本バンド」なる言葉を初めて聞かされた。私には「クマモトバンドウ」としか聞かえず、頭の中はひたすら疑問符が巻くだけであった。友人は「辻橋三郎先生と杉井六郎先生（いずれも岩倉の教師）が出演するからこれから聞きに行くのだ」と言った。私は何の関心もなかったから、友人たちと別れてそのまま帰宅したように記憶している。

それから五年。一九六五年に研究所の成果が『熊本バンド研究』（みすず書房）として結実したところには、私は「熊本バンド」に多少の関心を抱く大学生、それもキリスト教徒になっていた。が、高値すぎて私には手が出なかつ

た。一九六三年に出版された住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』（みすず書房）は千円であったので、かろうじて手が届いたが、『熊本バンド』の場合、三千円を出す余裕はとでもなかった。同書を座右に置くことができるようになったのは、やっと三十七年後（五年前の一九九七年）のことで、新装版が一万円で出た時であった。

同志社大学大学院（経済学研究科）に進む頃には、住谷悦治先生の指導を受けたいと思っていたから、キリスト教社会問題やら同志社史への関心はかなり高まっていたと思う。が、住谷先生は同志社総長であったので、指導はもちろん、授業すら受けられなかった。

同志社を出てからは地方生活が長かったので、その間の研究会の動向は『キリスト教社会問題研究』誌上で追うだけであった。ただ、休みや出張などで京都の実家に帰った時には、人文科学研究所で資料調査をしたり、杉井先生の研究室にお邪魔したりすることがあった。たまたまその日が金曜日になつたようなことがあると、勧められて研究会に臨席する特権に預かったりした。

そのうちの一回（あるいは初参加か）は今でも鮮明に覚えている。研究補助者であった吉田亮氏（神学研究科院

生」が『七一雑報』における朝鮮関係記事」を発表されたから、記録によると一九八一年一月一三日のことである。地方ではまず閲覧できない同紙（復刻以前であった）を大量に複写して、研究者が各自、手元に置いて分析する、という研究スタイルは私にはまさに垂涎の的であった。これが人文研の研究会か、というカルチャーショックを受けて帰った。

その後、私は京都に戻り、一九八七年四月から定期的に、というか恒常的に研究会に参加できるようになった。そうした折り、西海岸に留学中の吉田亮氏が一時帰国され、六月に発表された。その時のテーマ、「パークレーからみた日系キリスト教」は、地方にいて「葦の髄からしか天井をのぞけなかった」私の目を一挙に世界に向けてくれる効果をもたらした。

それまでの研究上の空白を埋めるためにも、研究会のすべてにとにかく「皆勤」する決意を固めた。要するにテーマは何であれ、毎週、金曜日は研究会に駆けつけることにした。私の生活は金曜日を軸に回転し始めた。気分としては大学院に再入学を許された社会人学生である。今年ですでに一五年生にもなるが、その間、当初の決意はほぼ貫か

れ、キリスト教社会問題研究部門に関する限り、年間を通して「皆勤」できた年も何年かあった。

ところが困った年もある。研究会の数が増え過ぎて、金曜日に別々の研究会が同時に、つまり啓明館の二階と四階とで開かれる事態に陥ったときである。例によってすべての研究会に登録したものの、要するにダブル・ブッキングである。私は仕方なく、研究会が重なった日は二階の研究会（石井十次の研究）に出席し、四階（教派・教会の研究）の方は諦めざるをえなかった。が、発表の時だけ後者に出るという「離れ業」（反則技）を駆使したこともあった。

発表当番がまわってきたのは、常時、参加し始めて二年目の一九八八年からであった。今回、試みに回数を調べてみたら、この一五年間に（今年度を含めて）都合三六回。一年平均で言えば、二・六回である。ヒットを打てたかどうかは置くとして、ともかく打数だけは異常に多い。その結果、『キリスト教社会問題研究』に載せてもらった論稿は（今年度を含めて）九編に及ぶ。共同論文集（人文研叢書）はこれまた八冊（今年度を含めて）に係わった。その他、人文研ブックレットにも二冊、関与した。時には公開

講演会に出演したり、公開シンポジウムの司会を担当したこともある。いやはや、相당한「露出度」である。

この間、杉井先生を始め、吉田亮先生、田中真人先生といった専任研究員にはことのほかお世話になった。とりわけ研究会後の二次会（最近はもっぱら新^{ニュー}北京か、おもの里）にもできるだけ「皆勤」することを心掛けたので、研究会での発表や報告のほかに金曜日の夜は田中先生の巧みな座談から刺激を受けて帰ることが多い。

一九九七年四月から私は非常勤嘱託（週二〇時間勤務）として同志社社史資料室を職場とするようになった。同室は人文科学研究所と同じ建物（啓明館）の階下にあるだけでなく、組織上も人文科学研究所の下部組織に当たるので、形式的には人文科学研究所に所属する身分となった。二〇〇〇年度後期からは常勤嘱託となり、毎日、啓明館に通勤する身となった。いよいよ身も心も研究所に捧げよ、との圧力がどこからともなく加わった気分である。時にはその重圧に押し潰されそうになりながらも、貴重な資料と熱心な研究者集団とに恵まれて、私は毎日、幸福感を味わっている。

（同志社大学嘱託講師）

私とCS—四半世紀の想いで—

室 田 保 夫

私が人文科学研究所の第一研究とかかわりをもち始めたのは、同大学院の頃からであり、半世紀以上のつき合いである。ちようにど研究所で留岡幸助の研究会が組織されたときで、研究会へ出てみないかと声をかけていただいたのが学部演習の先生、嶋田啓一郎先生であった。社会事業史というはやらない分野でまだ研究対象を明確にさだめていなかった小生にとって、留岡研究は未知なる、しかし興味ある対象であった。

この研究会には文学部社会科学から嶋田先生の他、小倉襄二先生や住谷肇先生も参加されていた。早速、留岡と関連ある丹波教会（丹波新生教会）の史料探しから入っていたが偶然にも留岡に関する多くの史料が発見できたことが、その後の研究の方向を定められたようなものであった。研究会をとおして杉井六郎先生との出会いもあった訳だが、もちろん私は社会学科出身で歴史には全く素人であった。

杉井先生は実証的で史料を大切にされる先生である。素人

的に史料は「解釈すべきもの」と思っていたが、実証的な方法はむしろ新鮮な観があった。必然的に修士論文は留岡になり、その後も留岡研究が私にとって大きなテーマとなった。その意味で研究の方向性と学ぶ機会を与えて戴いたことに感謝をしている。そしてCSは私にとって大学院以上のものであった。私見であるが、将来人文科学研究所が独立大学的機能をもつて良いのではないか（方法はいろいろあると思うが）。

その後研究会において『六合雑誌』の研究、『七一雑報』の研究、教会研究等に参加させていただき、違った研究分野の先生から多くの教えを受けたことは今の私の財産ともなっている。それぞれにおいても想い出は多いが、その中から二点に絞って記しておく。

まず私の研究領域から関連の深いものとして、「山室軍平の研究」がある。これは社会事業史に関連の深いものであったが、途中から種々の理由で積極的に出来なかったのは悔やまれる。併しこの研究をとおして、東京の山室軍平資料館やブース記念病院等で史料集めをした。また山室と関連のある人物として島根県横田の岡崎喜一郎という人物も研究対象に入れられ、三回ほど現地へいった想い出があ

る。さらにこの研究をとおして機関誌『ときのこゑ』の復刻や論文集『山室軍平の研究』が刊行された。

留岡、山室の次は「石井十次の研究」がある。これは一九九三年から一九九九年までである。資料の多くは日誌に頼ったが、同時に彼の生誕地、宮崎高鍋の近くの木城町に石井十次資料館があり、その石井や岡山孤児院関係の資料整理の作業が出来たのは大きな成果であった。研究所の社会的信用度が証明されたものであろうか。このように私はCSを抜きしては自分の研究が語れない程、沢山の想い出があり、大きな存在であり、多くの先生方より学恩を戴いた所である。

（関西学院大学社会学部教授）

思い出すことと

— C・S研究会入会のこと —

西 田 毅

私が法学部助手に採用されてすぐの一九六三年のころ、高橋貞三教授（法学部）から総選挙（一九六三年十一月二十一日実施）の投票行動について実態調査（共同研究）をするよう依頼された。たしか、岡本清一先生のお口添えもあったと思う。高橋教授は、そのころ、人文研の第一研究（近代京都における社会発展の諸条件の研究）、第二班教育・行政・政治班の研究會代表者であった。われわれ（太田雅夫、金丸輝雄と私の三人）の研究課題は、京都市民の政治意識の調査で、旧京都府第一区（伏見、右京両区を除く全京都市）の有権者を対象に、個別の面接調査によって政治意識を調査するかなり大掛かりな実態調査であった。もちろん、私にとってこのような実態調査は初めての経験であり、世論調査の方法や理論について短時間のあいだに集中的に内外の文献を読みふけた。その成果の一端は、翌一九六四年の日本政治学会で「政治意識に関する調査と

理論—京都府第一区の場合—」と題して共同報告した。そして、その報告を基に年報政治学一九六五『政治意識の調査と理論』（岩波書店）に「選挙に現われた政治意識—京都第一区の場合—」（共同執筆）を発表した。これが機縁になって、私は第三期（一九六五年四月）以降、現在に至るまで、ほぼ一貫してキリスト教社会問題研究会（C・S研究会）に兼任研究員として参加している。今、研究所の年表をくつてみると、研究会組織が整備されてくるのが一九五七年以降、そしてC・S研究会の統合決定をみたのが一九五九年のことであるから、私はC・S研究会の組織が固まり始めた初期のころからの研究会メンバーということになる。以下、若干の思い出を記しておきたい。

話は前後するが、私が大学院生の頃、東洋法制史の内田智雄先生から「ハーバード燕京同志社東方文化講座」のことをよくうかがった。内田先生はこの東方文化講座委員会の仕事に関係しておられて、そこが主催する公開講座の講義が一連の叢書として公刊された。

そして、その第一輯が先生の恩師小島祐馬博士の『中国の政治思想』（一九五六）であった。当時、内田先生は『中国歴代刑法志』や荻生徂徠の『明律国字解』の仕事で

忙殺されておられたが、われわれ学生の教材として、啓蒙的にして学問的水準の高いこの『中国の政治思想』をテキストに選ばれた。そして、折々の解説のあいまに、ハーバード・エンチン・インステイチュートが多額の資金を数年にわたって同志社大学に贈与されること、その資金を基に、貴重な文献の収集が人文研でおこなわれているという話がなされた。そして、若い日に内田先生が経験された小島門下生らとの共同研究のこと、本格的な学問をするには、孤独な学問的営為によって生ずる独善的な態度を取り除くためにも、共同研究がいかに大事であるかを強調しておられたのをよく記憶している。「耳学問」や懇談から得られる考えるヒントや示唆の重要性といったこともおっしゃった。そのような予備知識もあつて、いわば過大な期待感を抱いてC・S研究会に参加させていただいたのである。その頃の研究会（一九六五―七一年）は篠田一人教授が代表者であつた。

私は明治期と大正期の研究班の会合によく出席した。研究会は現在もそうであるが、各学部から専門を異にする人たちが、さらに、女子大や中高教員、外部の研究協力者も参加して行われるのであつた。広く門戸を開いて参加者を募

るのはいいが、異なる学問分野の方法的整序の問題はどうなるのであろうかという疑念に襲われた。私が入会した頃は「熊本バンド」の研究が主要なテーマであつた。雑誌『キリスト教社会問題研究』は数回「熊本バンドの研究特集」を組んだ。それらの先行研究から教えられるところは、もちろん多大であつた。とくに、未発掘の史料や歴史の影に忘れ去られた人物の発見は有意義であつた。

しかし、方法的省察にとらわれず、唯、事実を羅列することが歴史研究とは思えない。事実とは何か。実証性と解釈の問題、史料の発掘とテキストクリティークの問題をどう捉えたらいいのか。若気の遠慮のなさもあつて、篠田先生にこういった方法上の疑問を投げかけてみた。そのときの先生は驚くほど雄弁であつた。そして、後に先生の「思想史研究の方法について」（『キリスト教社会問題研究』第七号）をじっくり読んで、その時の話の中身を確認することができた。先生は「歴史を叙述するということは、過去の事実の部分的要素の累積的総計ではなくて、ある一連の事実の「全体」を把握することであり、ディルタイのいうようにこの「全体」の意味、目的にしたがう連関を明らかにすることであらう。そして、この全体の意味連関、目的

連関を把握するには、解釈とか理解とか直観とかいうようなはたらき、ないしは主体的構成とか構想とかいわれるようなはたらきがなければならない」と明言しておられる。

先生の熱弁の理由がよくわかった。そうして、「この研究会はまだ、そこまで達していないのだよ」とウエーバーやマンハイム、ポパーらの名前をあげて「まだ若いのだ。じっくりと方法論に時間を使い給え。早撃ち鉄砲よろしく書くだけが能ではないのだからね」とも言われた。

自らの筆不精の理由づけに、先生の片言隻句を引くつもりはさらさらないが、研究生活のいわばスタートラインの地点で経験したこの篠田先生との対話は忘れがたい豊穡な思い出となつて残っている。

(同志社大学法学部教授)

山本宣治の性教育

小田切明徳

「性教育のパイオニアが戦前の同志社にいた、山宣の性教育について調べて君がレポートせよ」と、一九七〇年代の始めに徳田御稔さんから「発育・発達段階研究会」の場でテーマを与えられたのが山宣との出会いであった。私の最初の関心は「進化論と生物学教育」研究であつて、性教育は素人であつた。この「人文研第一研究（以下CSと略）」が十年近くの歳月をかけて山宣の生家・「花やしき」に保存されていた資料を整理して、一九六八、六九年に「山本宣治関係資料目録（上、下）」を作成していたのは、私が同志社中学校に就職する直前のことであつた。同志社山宣会会員であり、CSの囑託でこの資料を編集した佐々木敏二さんと出会い、彼の紹介でCSに関わりを持つようになるが、先に述べようにCSで私は、排耶論研究のグループに属して、ギューリックや葵川信近の『北郷談』の報告をしたが、論文にまとめるまでには至らなかった。

七〇年代の初頭、同志社は学園紛争の渦中にあり、「赤

軍派による校舎占拠」のためこれら貴重な資料は「花やしき」の旧館大広間に戻った。その部屋は山宣の葬儀が行われた場所であつた。一階に炊事場があり、火が出れば大変だという理由から、その後、現在の倉庫に収まった。だから追加された資料は未登録のままで、せっかく分類された本や雑誌類も二度にわたる引つ越しによりバラケタままになっている。

私は教育現場の多忙さと研究課題の中心が生物学教育や自然観察会にあり、CSの研究会への参加も途切れがちになり、一時中断となつた。

さて、山宣の貴重な資料が蔵の倉庫に納められたが、これら非公開放扱いであり、山本宣治全集、選集も全巻揃っている所がなかった。そこで山宣の一次資料を多くの人に見てもらおうと、佐々木さんの発議で、新『山本宣治全集』（七巻、汐文社）出版を第一の課題に掲げた。それまで山宣研究は政治家としての評価が中心で、生物学者・性学・性教育方面のアプローチは殆どなく、私は後者の役割を受け持った。第二の課題は、二次資料の収集であり、生前の山宣と直接に面識のあつた住谷悦治、田村敬男、木村京太郎さんらの声、論文を中心に『山宣研究』の編集・発行の

任にあたつた。これは一五号まで出した。はじめは校正ミスが多く、和田洋一さんから「こんなのは読めない」と酷評された。その後、山宣の主幹雑誌『産児調節評論・性と社会』の復刻（不二出版）を出し、非公開放原則の資料館にあつて、基本文献の公開の目標は達成した。

第3段階は、山宣の性教育や産児調節運動の評価である。これに取り組むにはセクソロジーや「性と社会」の関わりについての知見の蓄積が必要であり、そのためには時間が必要であつた。結果的に、私加入した性教協（人間と性）教育研究協議会に参加した九〇年代初頭には、HIV/AIDSのボランティアに関わることでゲイ、レズビアン、TS（性転換者）、IS（半陰陽者）等のいわゆる性的少数者・当事者との出会いで、この分野・セクシュアリティの学習が深まつた。この分野での研究は発展途上にあり、八〇年代からのフェミニストによる貢献で登場したジェンダー概念と、フーコーらゲイ・スタデーに触発されたセクシュアリティ概念の登場で状況が一変した。九〇年代に入ると、後者はクイア・スタデーと当事者から呼ばれる問題提起がなされ、これまでの性逸脱・異常の概念が吹き飛ばされている。こうして、私の第三の課題に取り組

むモチベーションが高まり、CS再加入し、「女性キリスト者班」と第十一研究「社会運動・政策決定とジェンダーの国際比較研究班」で学び始めている。

第四の課題であるが、山宣資料室の山宣・安田性学文庫にあるエリス、ストープス、プロットホらの一九二〇年代のセクソロシストの文献読みである。四月から「花やしき」に週一回通い、整理を始めた。CSの先輩が整理した資料の活用のお手伝いをするには、どうしたらよいかと考えている。先輩諸氏にご助言を賜りたい。

(山宣性教育研究室長)

同志社人文研への感謝

大江 真 道

私は一九九二年から九七年まで、同志社大学人文科学研究所の「教派・教会の研究」に参加しました。二〇〇一年三月に聖公会の京都聖ヨハネ教会牧師を定年で退職し、山科に住んでいます。日本聖公会歴史研究会の会長はそのまま続けています。そして、今もキリスト教社会問題研究会に継続して出席させて頂いております。私は大江満氏とともに一九九七年三月に「研究叢書第二六号」として出版された『日本プロテスタント諸教派史の研究』の原稿を執筆しIの概説・第一章に「日本聖公会史」を書かせてもらい、大江満氏も、IIの各論・第一章に「米国聖公会の日本伝道草創期―一九世紀の海外伝道局の財政―」を執筆させてもらいました。

「教派・教会の研究」の共同研究への聖公会への最初の呼びかけは、京都教区資料室の管理をしている加納重朗司祭（退職・当時桃山基督教会牧師）に土肥先生から要請されたのですが、加納司祭は固辞して大江満氏に依頼しまし

た。彼も働きながら米国の聖公会アーカイブから持ちかえったウイリアムズ主教の資料と格闘中であり、結局、名古屋にいた私が土肥先生が招集された最初の会に出席しました。私は六〇年から開拓伝道で二七年働いた名古屋聖ヨハネ教会から名古屋柳城短期大学に八八年に転勤し、九三年に桑名エピソード教会へ、九五年から京都聖ヨハネ教会に転任しました。京都に住むことになったので「日本聖公会史」(略史)の原稿執筆の最終段階では五条から研究会に出席することができて助かりました。人文研のキリスト教社会問題研究会の働きにはかねてから敬意を抱いてきました。特に戦時中の合同問題を扱った新教出版社から出された三冊本には当時の日本聖公会の記録があり、特高警察の資料からの提示にとっても驚いたことでした。

研究期間中の一九九四年に日本キリスト教団宣教研究所で日本聖公会の合同参加加入申込み書の綴りが発見されました。史料の点検、複写、分析の仕事を土肥昭夫先生は私にゆだねてくださり、研究所の戒能牧師を紹介してくださいました。私は直ちに早稲田の研究所を訪れ資料を複写させてもらいその内容を分析して「歴史研究」誌の第五号(一九九四年十月)に掲載しました。この資料で戦時下に

日本基督教団に加盟申請をした日本聖公会の教会数が「八九」であったという最終的な結論を得ることができ、『日本プロテスタント諸教派史の研究』のなかの「日本聖公会史」に記述できたわけです(三六頁)。また杉井六郎先生には京都教区資料室のウイリアムズ主教の書簡などの資料を整理して頂きました。昨年、英文の「ウイリアムズ主教書簡集」が「立教学院百二十五年史」の第四、第五巻として刊行され、大江満氏が解説を執筆しています。土肥先生は昨年、東京の聖公会神学院で集中講義をされました。このように同志社大学人文科学研究所の諸先生方から聖公会の歴史の研究に対してご配慮頂いていることを心から感謝しています。キリスト教社会問題研究会が今後ますます幅広くエキュメニカルな視点から参加者を組織して研究者を督励しすばらしい成果をあげられるようにと願っております。

C・S研究の時空

——同志社の研究モデルとして——

小倉 襄 二

私にとって、ヘキリスト教社会問題研究（C・S）を想うとき、赤煉瓦のキャンパス、永かった同志社での教学・研究、その時空の流れへの回想に深く彩られてくる。情景をかさねて懐旧の情感が先行する、C・S研究も戦後同志社の歴史的な推移と状況の変化、時代の諸相に敏感に相關してきた経緯に交錯する。この共同研究にかかわった研究者の戦後史、その軌跡でもある。一人一人の面影、その思考、発言、論証のかたちがよみがえってくる。同志社を軸としなければというC・S研究は形成、持続できなかったといっている。

C・S研究は複雑・多岐な領域へ展開したが、私は社会福祉研究、その近代への史的アプローチへの関心を中心に参加した。住谷悦治先生はC・S研究の発足にとつて創意と指導にあたられた。初期メンバーの論稿集として『日本におけるキリスト教と社会問題』（住谷悦治編・みすず書

房・一九六三年七月刊）に留岡幸助についてその慈善事業思想や「人道」についての小稿を掲載することができた。

その後、この初期グループのメンバーを加えて人文科学研究所の研究チームとして同志社大学における学部を越え学外の研究者も広く結集するC・Sのシステムが確立することになった。私はその一員としていくたびかの「キリスト教社会問題研究」への寄稿、研究会への参加などC・S研究の遠く永い道程に就くことができた。

その後の「留岡幸助の研究」「山室軍平の研究」「石井十次の研究」への参加、戦後福祉の意味、基本を問うときC・S研究が照明しようとしたこれら先覚、そして同志社からの発信なくして現実の福祉研究の検証、実践の認識は成ししないという想いがC・S研究への私のつよい絆でもあった。

さらに私としては「戦時下抵抗の研究ーキリスト者・自由主義者の場合」（同志社人文科学研究所編Ⅰ・Ⅱ・みすず書房・一九六九年刊）でも共同研究の一員たりえたことは望外の倖いでここでも、ヘキリスト教社会事業の論理をまとめ、とくに戦時下の抵抗との関連を扱うことができた。C・Sの各世代を交えての研究交流や啓示により私の

拙く未完の福祉理論の概要の思考をここで据えることもできた。

C・S研究のシステムは私としては同志社ならではの研究モデルとして独自の位置を学内外、学会に提起していると考える。不定型にみえながらこれほど自由にしかもそれぞれ研究者の自律を大切に作るモデルは類をみない。その消長は避けがたいがこの研究体制のモデルを意識化してさらに研究開拓の伸展を切望する。

初期グループの時空にはすでに点鬼簿のうちに在る先生方も多い、住谷悦治、篠田一人、和田洋一の諸先生などその声咳に接した感慨も私のC・S研究への想いに刻されている。終りに杉井六郎先生はじめ、田中真人先生、挙名はできないが多くの人文科学研究所のスタッフの方々のこのうえない配慮がこのC・S研究の時空の流れを支えたものとして深い感謝の意を表したい。

(同志社大学名誉教授
大阪人間科学大学特任教授)

同志社の自由主義の賜物

奥村直彦

一 本研究会との出会い

私が初めてこの研究会に参加してから二十一年余りになる。当時、神学部で竹中先生の組織神学を聴講しており、先生のご推薦と旧知の武先生のお口添えもあつて本研究会に入会させて頂いたのである。その折、啓明館三階の人文科学研究所（以下、人文研と略称）応接室で私の話を聞かれた杉井先生が、ここの図書館には「湖畔の声」もあります、などと話されたことが印象に残っている。

それよりさらに十年ほど前、私が高校教頭をしていた頃、文学研究科の院生を社会科の非常勤講師に採用するため、その指導教授であつた篠田一人先生のお宅をお訪ねしたことがあつた。その時、本題とは別に先生が近江兄弟社のことについて種々質問されたが、当時、近江兄弟社が研究的関心を持たれているとはあまり考えていなかったもので、逆に学問的刺激を与えられた記憶がある。

研究会に参加後は、上記竹中先生以外に、大学院で土肥先生のキリスト教史研究演習にも参加させて頂き、また杉井先生の綿密な実証、笠原先生の文学的視点、田中先生の社会的視点等々に教えられるところ多かった。

二 研究テーマと活動

私の主テーマは、日本近代キリスト教史における、ヴォーリズと近江ミッシヨンの研究であるが、研究会においては、諸先生の個別テーマの発表を聴き、討論に参加することによって、また共同研究に参加することによって、キリスト教社会問題の所在と領域、先行研究及び研究方法を学ぶ上で大変勉強になった。その間、私自身の研究発表も何度かさせて頂いたし、紀要「キリスト教社会問題研究」や、人文研編著の何冊かの学術書の共同執筆者に加えて頂いたものを含めると、ヴォーリズ研究、移民、「新人」研究等の拙論は十指に余る。

ヴォーリズ以外の研究で特に印象深いのは、移民研究班に属して、カナダでの調査チームに参加したことである。一九九〇年夏、移民研究班の分担調査のために、単身トロントのオンタリオ州立公文書館へ何日か通ったこと、班の

仲間と現地の一世や二世移民を訪問したこと、また、自分の個別テーマである「ヴァンクーバー日本人学校」研究のために、現地を調査したり、UBC図書館へ日参したことがなどが想起される。現在、移民研究は人文研から独立した学会となっているが、当時、竹中先生はじめ、リーダーの佐々木さん、山本、森川、永岡、吉田、坂口さんらとのフイールドワークの日々が思い出される。各自の研究結果は「キリスト教社会問題研究」四一号に英文で報告されている。

三 評価と展望

以前、私は数年間、人文研と併行して母校の早稲田大学社会科学研究所特別研究員として、その近代思想部会に属しており、紀要「社会科学討究」に、近代日本研究の視点からキリスト教受容と変容についての論文を発表したことがある。その社研でも、原史料に基づいて実証的研究を進めていくことは当然であったが、時として本研究会とは「学風」の違いのようなものを感じることがあった。もちろん、和洋の第一次文書を読まずして歴史研究ができないことは自明であり、この場合の「違い」の実感は何かとい

う素朴な疑問は当分暖めておきたい。

私は、まだ二十年余の参加に過ぎないが、全国のお教育学会やキリスト教史学会などに出て感じるのは、本研究会が日本の近代キリスト教史研究に果たしてきた役割と貢献の大ききである。それは多彩な研究者に自由で広範囲な研究を許してきた同志社の自由主義の伝統の賜物によるものと言えよう。ただ、「キリスト教社会問題研究会」がキリスト教に関わる研究である以上、その対象がどのようなキリスト教信仰と教義に立脚した活動であり事件であったのかに注目し、また研究者自身がどのような立場において立論するのかを明らかにしておく必要があると思う。近代日本のキリスト教会や団体は少数派であり、依然、トレルチのいうセクト類型に属しているからである。しかし、研究者は必ずしも信仰者である必要はなく、ただ、「セクト」信仰者は教義に囚われて研究が偏る危険があり、逆に信仰者でなければ理解できない歴史事象もあることを忘れてはならないと考える。

ともあれ、これまでの研究会での上記諸先生はじめ、諸先輩の学恩に感謝し、今後も地道な研究に励みたいと願っている。

C・Sは私の研究生活の原点

太田 雅夫

私が同志社大学人文科学研究所に直接関わりをもったのは、一九六〇年五月に研究調査部主幹補佐となったときからである。その後一九六四年九月に専任研究員として採用されたが、一九六五年九月から人文研の研究活動体制の改組により、杉井六郎専任研究員とともに、第一研究「キリスト教社会問題研究」の所属となった。

当時のキリスト教社会問題研究会（代表者篠田一人）は、「明治キリスト教の思想的的研究」（代表今中寛司）、「大正期のキリスト教と社会問題」（代表土肥昭夫）、「戦時下のキリスト教および自由主義者の抵抗に関する研究」（代表和田洋一）、「教会研究」（代表高橋虔）の四つの研究班で構成されていた。私は主に大正期と戦時下の研究班を担当することになったのである。

私のその後の研究テーマが、初期社会主義史の研究、大正デモクラシー研究、戦時下抵抗の研究という三本柱となった原点というのは、C・S研究会で大正期・戦時下の研

究班に所属したことに起因する。

当時のC・Sは、資料収集も重要な仕事であり、篠田先生・杉井先生と山口県下の教会をめぐり歩いたことや、研究グループで信州穂高の研成義塾の資料調査や海老名弾正の資料調査などがあり、今なお人文研の整理カードには私の筆跡が残っている。

とくに、近藤栄蔵関係資料調査では、千葉県の高九十九里浜まで出かけ、末亡人を訪れ交渉してすべての資料(約二〇〇〇点)の寄贈を受けることになった。これらは『近藤栄蔵文庫目録』(一九六九年)としてまとめ、近藤の自伝原稿を人文研編で『近藤栄蔵自伝』(ひえい書房、一九七〇年)として公刊した。このなかには、暁民共産党に関係のあった高津正道・浦田武雄・高瀬清による座談会「暁民共産党と第一次日本共産党」を行ない収録している。これが機縁となって、一九七一年には、水谷長三郎所蔵資料の寄贈を受けることにもなるのである。

C・S研究会で収集された資料は、職員の方々と一緒になって作業し、『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』(一九六七年)、『キリスト教社会問題研究会雑誌新聞目録』(一九七〇年)の目録化が実現した。

私は、C・S研究会での報告や討議による学習、資料収集の体験を通して、学問に対する私自身の実証的研究の思考が次第に身についてきたと思っている。したがって、この時期に私は新しい資料を発掘することによって、次のような論文を発表することができた。

「星島二郎と『大学評論』」(『キリスト教社会問題研究』第一一〇号、一九六七年)

「早稻田政治学派と大山郁夫」(『社会科学』第九号、一九六八年)

「ジャーナリスの抵抗―桐生悠々と『他山の石』」

(『戦時下抵抗の研究II』みず書房、一九六九年)

「社会民主党の結成と禁止」(『社会科学』第一二〇号、一九七〇年)

「吉野作造と大学普及運動」(『キリスト教社会問題研究』第十六・十七号、一九七〇年)

とりわけ、『戦時下抵抗の研究―キリスト者・自由主義者の場合―II』の実質的な編集にたずさわり、一九六八年八月に、宇治の花屋敷に戦時下抵抗グループの代表者和田洋一先生、C・S代表者篠田一人先生や執筆者平林一・笠原芳光・小倉襄二・河野仁昭・辻橋三郎・佐々木敏二・宮

沢正典・高道基・郡定也の先生ら十二人が一泊二日の合宿をして、私と笠原先生が司会を担当し、シンポジウム「戦時下抵抗をめぐる」を行なった。この侃侃諤諤の討議を巻末に収録し、好評をえたことなど、今なつかしく想い出されるのである。

私は一九七二年に同志社大学を退職し、新居浜市に開学された桃山学院短期大学に勤務し、その後十年間にわたって学長職についたため、遠隔地であったのと学内行政の多忙さで、C・S研究会に参加することができなかった。しかし、一九八九年から桃山学院大学教育研究所（大阪）勤務となったことから、再度、キリスト教社会問題研究会に参加することができるようになった。

そして「近代天皇制とキリスト教の研究」（代表者土肥昭夫）、「『新人』『新女界』の総合的研究」（代表者竹中正夫）、「新島襄の学際的研究」（代表者伊藤彌彦）の各共同研究班に参加してきたのである。その結果、それぞれの人文科学研究所の研究叢書に、「木下尚江の天皇観」（「近代天皇制とキリスト教」所収）、「本郷教会の人びと」（「吉野作造とキリスト教」（『新人』『新女界』の研究」所収）、「新島襄と家永豊吉」（『新島襄全集』を読む」所収）を

執筆することができたことを喜びとしている。

私はすでに古稀の齢を迎えているが、キリスト教社会問題研究会から受けた学恩に報いるためにも、殆ど研究会には皆勤を目標に頑張っている。というのも、ボケ防止のため若い熱心な研究者の報告や討論を拝聴することを、楽しみにしている今日この頃であるからといえる。

（桃山学院大学教育研究所名誉所員）

研究会との出会い

佐伯 友弘

忘れもしない、昭和五十九年十月二日から三日間、同志社大学人文科学研究所図書室で史料収集をした。多くのキリスト教徒である恩師たちに囲まれながらも、同志社大学を訪れたのは、これが最初であった。

私は、昭和五十九年三月までの約六ヶ月間、文部省の国立教育研究所の佐藤秀夫室長（現日本大学教授）のもとで、明治三十二年私立学校令の研究を進めていた。研究を進める過程で、国立公文書館、外務省外交史料館、国会図書館の基本的史料はある程度押さえていたが、どうしてもキリスト教関係の史料が必要であった。人文科学研究所で、杉井六郎教授の研究、さらに機関誌『キリスト教社会問題研究』での小沢三郎関係の史料紹介、解説といった研究の基本的史料を得なければならなかった。

私が「キリスト教社会問題研究会」と出会ったのは、確か、十月二日の人文研図書室の書庫で史料収集作業をしていた時、図書室の受付係の方が入庫してこれ、私が、厩

大なキリスト教関係の資料に驚いて、「すごい史料文献ですね」と話しかけたところ、「このキリスト教関係資料は、多分世界一でしょう。杉井六郎教授にお会いになったらどうですか？」と示唆を頂いたのが契機であった。私は、予期せぬ展開に揚まる胸を押さえ、コンタクトをとって頂き、夕方、研究室で杉井教授に拝謁することができた。杉井教授は、新島襄の書簡の話をされながら、「キリスト教社会問題研究会」例会を、私に紹介された。今でも、その時の「来る者は拒まず」という研究に対する開かれた姿勢をもっておられる杉井先生のお顔を、はつきりと記憶している。そしてキリスト教研究に関して、第一線の蒼々たるメンバーを擁している研究会例会に、私のような未熟な者の入会を許可されたことに感謝の念をもった。その際、例会に出席することは少し時間的、距離的に大変だとは考えたが、「キリスト教社会問題研究会」に参加させて頂くことを決めた。しかし、山陰から、月一回の例会へ参加することは、思いのほか、大変であった。「キリスト教社会問題研究会」に参加させて頂いて、約十六年にもなるが、私の関わった「仕事」の少なさを嘆いているというのが率直な気持ちである。地方大学の「教員養成学部」特有の「雑

務」に加えて、昭和六十三年から平成元年にかけての十三ヶ月間の文部省の在外研究、又、平成九年から十三年春までの四ヶ年間にわたる附属小学校校長の併任という「欠落期間」があり、時々、研究会に参加させて頂いているだけ、というのが事実である。ただ、今でも慚愧の念に耐えないことは、ほぼ順調に進んでいた『新人』『新女界』の研究』の原稿作成が締め切りに遅れてしまったことである。

また、田中真人教授からは、入会を許可されて以来ずっと、細かいことを含めて、お世話、ご配慮を頂き、感謝の念を禁じ得ない。研究会に対しては、殆ど貢献できず、申し訳ない気持ちで一杯であるが、自分の研究には大変役立っていると思っている。

漸く時間がとれるようになったので、「真面目」に研究会に参加することを肝に銘じて、五十周年の記念すべき契機を噛みしめながら、「人との出会い」を大切にしたいと思っている。

（鳥取大学教授）

私の人生を決定づけたCSの研究会

坂口満宏

思い返せば返すほど、第一研究会（CS）の研究補助者を務めた二期六年間（一九八三年度～八八年度）は、研究者としてまた生涯の伴侶を得たという点において、実に私の人生を決定づけるものだった。

研究補助者となった時の私は、まだ修士論文も書き終えていない学生にすぎなかったが、週ごとに替わる五つの研究班に参列したことで、日本社会とキリスト教、排耶論、平和運動、移民、山室軍平——と、実に多くの事例と課題について耳学問させてもらい、折をみては発表の機会も与えてもらった。

正直なところ、当時は手当たり次第にこれらすべての研究テーマに喰らいついていた。着実に一つの課題を深めている同年代の院生から「お前の専門研究は何なんだ？」と尋ねられた時には、「排耶論についても調べているし、山室軍平のことも、あつ、それに海外伝道と日本人移民についても調べているんだ」と応え、強がっていた。「器用

貧乏」のそしりをまぬがれない院生であった。

それでも三年が過ぎ、二期目を迎える頃からは、山室軍平を切り口にしても移民のことが見えるようになり、排耶論を視座にしても山室軍平と救世軍が見え、移民と排日問題からは日本の平和運動にかかわった人物と団体が見えてくるなど、個々の課題が相互に関連しあい、一つの大きなメビウスの輪として、切れ目なく、結びついていることが自覚できるようになってきた。もともとCS（キリスト教社会問題）という大きな問題群のなかに点在する個別課題に取り組んでいたのだから、それらが互いに結びつきあうことは自明のことだったのかもしれない。だが、そうした結びつきを私自身の言葉をもつて語ることができるように思えたのである。

普通の大学院生であつたなら一〇年以上かけても達成できないほどの多くの課題を、わずか五、六年のあいだで、たまたま掛けるように取り組むことができたのも、共同研究という環境が私の日常生活であつたからにほかならない。妻との出会いについては：紙幅も尽きたので、さらなる五〇号を積み重ねたうえで語ることにしよう。

（京都女子大学）

人文研と私たち

坂本清音

私は今、人文研の三つの研究班に属して勉強をさせてもらっている。「アメリカン・ボード宣教師文書の研究」、「同志社社史資料の研究」（その前は「新島襄の総合的研究」）、そして「女性キリスト者研究」班である。もちろん、最初から三つ全部に入っていたわけではなく、知らない間に三つになってしまったのであるが、無謀かなと反省しつつ、やはり止められないでいる。その結果、三〇六ヶ月に一度は必ず巡ってくる発表の準備に泣かされているというのが現状である。

最初に入会したのは、「アメリカン・ボード宣教師文書研究班」であつたが、人文研での研究歴の長い同僚宮沢正典教授のお誘いを受けてであつた。この研究班は、今年で十年目になるはずであるが、メンバー歴十年というのは、まだまだ新米の部類であろう。ちょうどその一年位前から女子大学では女子教育の研究班が始まり、その中でどの面から女子教育にアプローチするかを決めねばならなかった

ときに、私は大した思い入れもなく、「女性宣教師」と書いた。不思議なことに、それが後の人文研の研究メンバーに入れていただく理由となり、ある意味で今や、私のライフワークのテーマになりつつある。

「アメリカン・ボード宣教師文書の研究」班の毎月の研究会での作業は、「人文研の基本姿勢、資料に基づく実証的研究」を地で行くものである。すなわち、今から一二〇〜三〇年前に宣教師たちが本国のボードに送っていた手書きの英文書簡や報告書の類を丹念に読むことを第一義とするからである。想像されるように、手書きのものを読み解くという作業は、活字に印字された書物または論文を読むのとは大違いで、なかなか骨の折れる作業である。おまけに、昔の人は紙を大切に使うので、一枚の紙の両面が使用されている書簡もある。それをマイクロフィルムから紙焼きすると、裏面の字が写し出されて判読が甚だ困難となる。しかしながら、飽きずにこつこつやり続けていると、次第に書き手の癖が呑み込め、手書きなので嫌でも書き手の思いや感情が直接的に伝わってきて、黙々と時間のたつのも忘れて集中することになる。その上、アメリカン・ボード宣教師文書の場合、日本では大部分は自分が読むのが初め

て（少なくとも研究発表されていない）ので、それに基づいて発表するものは全てオリジナルとなる。そのようにして、各自の分担に従って宣教師レポートを学び、それによって歴史の一齣一齣が明らかにされていく。まさに歴史研究の醍醐味を味わせていただいた気がする。

その成果がまとまってメンバーによる『来日アメリカ宣教師』（一九九九年）の出版となり、日本キリスト教史学会での全国大会シンポジウムでの発表（二〇〇一年）となった。人文研研究会参加のお陰である。

私にとって人文研参加二番目の収穫は、「新島襄の総合的研究」班に加えていただき新島襄と出会ったことである。女子大学で育ち女子大学で教鞭をとってきた私にとって、大学に所属される方に比べると、新島襄との間に少し距離があったように思う。それゆえ、この研究班に入会を勧められた時には、かなり逡巡した覚えがある。しかし、発表の順番が回ってくる毎に彼の書簡を読むことを余儀なくされ、真摯な人柄、教育の姿勢、神への絶対的信頼、そして暖かくてユーモアのある気質等々を実感し、新島に対し心から敬意を抱くようになった。そして気が付くと、これまでなんとなく敬遠していた新島研究にも加えていただい

いる。これからも新島研究者に少ない、女性の視点からみた彼をクローズアップしていけたらと願っている。そして三番目の「女性キリスト者の研究」とは、まさに自分自身は誰であるかとの問いである。自分発見はプラス面にしろマイナス面にしろ、なかなか興味深い。この年齢になって知らされる自分のマイナスはそれなりに苦しいものがあるが、すぐにそれをプラス思考に変えるキリスト者としての私がいることは有り難い。三つの研究班ともに、私の実存と深く関わることを考える場になっていることに対し、人文研に深甚の感謝を捧げたい。

最後に付け加えさせていたきたいのは、人文研と坂本（武本）武人との関係である。一九五八年に結婚した私たちの生活費は、定職のなかった夫がCSから貰ってくる臨時研究員としての給料を主たる財源としていた。夫は竹中正夫先生、岩井文男先生などのお伴をして、大きくて重いテープレコーダーを軽々と楽しそうに持つて、岡山や丹波の諸教会の聞き取り調査に同行させていただいた。夫の研究生活の始まりがCSであった。晩年、夫は「あんたは僕が若い頃していたのと同じことをしている」とよく言っていた。

人文研は、若い頃の私たちを、そして今老いつつある私を、心身両面から支えてくれる研究会であると言える。

（同志社女子大学特任教授）

「沢山保羅研究会」から 「キリスト教社会問題研究会」へ

佐野 安仁

同志社大学人文科学研究所のキリスト教社会問題研究会に初めて参加したのは、私が同志社大学に就職した一九七九年の四月であった。「松本平におけるキリスト教」についての研究会であったことを記憶している。この参加に至るまでには篠田一人先生と杉井六郎先生とによるご助言、ご指導が強く働いていた。

私が梅花学園に在職中、『熊本バンド研究』を出版して間もない篠田一人先生からお手紙をいただいた。その中味は、梅花学園を中心に「沢山保羅研究会」を発足させないかというご提案であった。このご提案を受け、まず当時、梅花の学園長であった片桐哲先生と相談し、また、茂義樹先生を始め多くの学園の方々と協議して一九六七年に沢山保羅研究会が生まれた。それ以来、篠田一人、杉井六郎、土肥昭夫の各先生から研究上のご指導をいただいていた。その結果、二〇〇一年、茂義樹先生を始とする梅花学園の

先生方の努力で『沢山保羅全集』が公刊されたことは大変嬉しいことである。

さて、梅花学園から同志社大学に移ってからでも沢山保羅との関連で明治期のキリスト教及びキリスト教教育への関心が持続していたこともあり、また篠田一人先生、杉井六郎先生とのご縁もあつてキリスト教社会問題研究会に加えていただいた。同志社在籍二〇年、その間、この研究会において大変多くのことを勉強させていただいた。まず、杉井先生のご指導で「六合雑誌の研究」に加えていただいた。哲学者、森田久万人について、また心理学者、元良勇次郎について調べる機会が与えられ、同志社の豊かな資料に触れることができた。次に、「七一雑報の研究」に参加させていただいた。「七一雑報」から安息日学校成立の記事を拾い集め、日本のキリスト教教育が、誰によって、どのように普及したかを見た。また、地方へのキリスト教の伝道がどのように展開されたかを信州に限定して調べた。さらに幸いにも「山室軍平の研究」、「新人、新女界の研究」にも参加することができた。特に後半は田中真人先生からいろいろのご助言をいただき、お世話になった。

人文科学研究所の所蔵資料を十分に使いこなすまでの研

究は、できなかったが、恵まれた研究環境のなかで学べたことは幸いなことであつた。また、学外の多くの友人を協力研究員として紹介させていただき、それぞれに素晴らしきお仕事に取り組んでいる様子をみると、この研究会の懐の広さ、深さに感服している。

研究機関として高く評価されている同志社大学の人文科学研究所が、伝統を継承し学術の向上と共に研究者の養成にもますます躍進されることを期待して止まない。

(同志社大学名誉教授)

澤山保羅、D・C・グリーン、CS

茂 義 樹

私は一九六五年梅花学園に就任した。そこで創立者澤山保羅について詳しく知りたいと思つたが学内に資料はほとんど何もないことが分かつた。そうしたことを当時梅花女子大学におられた佐野安仁先生(現、同志社大学名誉教授)と話した時に、それでは私たちが澤山保羅研究会をつくって資料収集を始めよう、ということになった。その時私たちが聞いたことは、同志社大学人文科学研究所の篠田一人(故人)、杉井六郎両教授がすでに資料収集に着手されている、ということだった。間もなく杉井先生からすでに終了した浪花教会での収集資料も提供するから、一緒にやろうという好意あるご返事を頂いた。そこで浪花教会の足立宇三郎氏を加えて梅花学園澤山保羅研究会が結成された。

一方、私は澤山保羅を信仰に導いたD・C・グリーンについて知りたいと思い、関西学院大学川村大膳教授を訪ねて初めてアメリカン・ボードの宣教師文書のマイクロフイ

ルムと出会った。さつそく同教授からグリーン書簡のコピーを頂いて持ち帰った。こうして私の澤山保羅とD・C・グリーンとのつきあいが始まったのである。

一九六八年『沢山保羅研究』1を刊行したが、私はアメリカン・ボード資料の中の大阪ステーション・レポートから澤山保羅、浪花教会、梅花女学校関係を纏めて「明治初期における組合教会の大阪伝道と梅花女学校」と題する小論を発表した。これを土肥昭夫教授に送ったところ、「今後の研究を期待する」との葉書を頂き、キリスト教会問題研究会に参加するように紹介を頂いた。多分六八年三月か四月の研究会への出席が最初だったと思う。以来三三年、多い時は毎週、少なくとも月二回は研究会に出席を続けている。

研究会では杉井六郎先生に歴史研究の方法を教えられた。実証主義というのか、資料を探して、それを丁寧に読み、見解を纏める。思いこみや頭軔的な発想は排除する。裏付け資料も得る。こういった見解を育てられたのは人文研である。

『澤山保羅全集』を今回出版し、杉井先生から委託された資料等を世に出したが、語学能力に欠ける私を中心とす

る編集では十分な解読ではなかったかと危惧している。一方、グリーン研究は一八八〇年を前にして立ち往生の有様であるが、彼の横浜時代、同志社時代、東京時代をはやく纏めたいと願っている。

その間に人文研や三研究会（宣教師研究班）はより完璧なアメリカン・ボード宣教師研究を纏める作業に入るだろう。宣教師研究班参加者のやる気満々の気迫とチーム・ワークには元気づけられる。ウーマンズ・ボードの研究など、大きな成果が上がりつつある領域もある。二〇〇一年九月梅花女子大学で開催されたキリスト教史学会で『女性宣教師の伝道と教育——アメリカン・ボードの場合』とのシンポジウムが行われ坂本清音、石井紀子、宮地ひとみの諸氏が発題され、大好評を博したのも、キリスト教社会問題研究会の成果の一つであった。

（梅花女子大学教授）

CS研究会に期待する

塩野 和 夫

多読だった高校生の時に強く印象に残った一冊として和田洋一編『同志社の思想家たち』（一九六五）がある。なかでも、笠原芳光「柏木義円―非戦平和のキリスト者―」には心を洗われた。同志社大学経済学部に入學した一九七一年の九月に安中を訪ねた。柏木の生活と教会活動、そして思想の場を歩いてみたいという衝動にも似た理由からであつた。

和田氏によると「同志社が生んだ思想家を何名か系統的にとりあげ、そのことによって同志社の歴史を見直すという試みはどうだろう」という同志社大学生協出版部の呼びかけが『同志社の思想家たち』上下巻を生み出すきっかけとなつた。生協出版部には「学生諸君にも喜んでもらえるようないい書物の出版をこれからやっていきたい、そして同志社の発展のためにささやかでも寄与したい」という願いもあつた。（和田洋一編『同志社の思想家たち』下巻、一九七三、一頁）取り上げられた人物は「新島襄・柏木義

円・海老名弾正・安部磯雄・山川均・デントン・周再賜・湯浅八郎（以上、上巻）、徳富蘇峰・小崎弘道・大西祝・徳富芦花・中島重・留岡幸助・山室軍平・山本宣治（以上、下巻）」である。

キリスト教社会問題研究会発足時（一九五六年）の代表者は住谷悦治氏である。「趣意書」（一九五八）はその「目的」を「近代日本の社会思想、社会運動に及ぼしたキリスト教、とりわけプロテスタントの影響を明らかにし、これに関する資料を蒐集、整理、研究するとともに、この資料を広く国内外の研究者の便に供する」とする。「意義」の中で「我が同志社の先輩の中から、多くの社会思想、社会運動、社会事業にふかくかわりあいをもち、しかもその分野で先駆的役割を演じた人々が数多く排出している」として、「ラーネット・小崎弘道・宮川経輝・海老名弾正・山室軍平・柏木義円・岸本能武太・湯浅治郎・安部磯雄・浮田和民・中島重・山川均」を挙げている。（同志社大学人文科学研究『同志社大学人文科学研究所の50年』一九九四、一七一―一八頁）

CS研究会の発足と『同志社の思想家たち』発刊には中心となつた推進者や目的、あるいは十年ほどの時間的な違

いがある。これらは、しかし、事柄上さして大きな問題とはならない。むしろ、両者の底流に共通する指向こそ興味深い。同志社の歴史に彼らはいずれも関心を寄せる。この歴史は同志社が生んだ思想家たちによって把握できる。そこで、学生を対象として思想家たちの生き方と思想をまとめ、あるいは研究者を対象として研究環境を整える。同志社は志を重んじて設立され、その校風は特色ある人物を生んだ。このような同志社の歴史に対する共感と期待が両者からにじみ出ていると私は見る。

キリスト教史(3)のレポートに柏木義円を取り上げ、「愚俗の信」と題して土肥昭夫教授に提出したのは一九七七年一月のことであつた。まもなく、土肥教授に紹介されCS研究会に出席した。発表者は地道に研究された成果を十名ほどの参加者に発表されていたような記憶がある。次いで出席したのは一九八九年四月で、やはり土肥教授の紹介による。以後、四年を費やし一九九三年三月に同志社大文学神学部に『日本組合基督教会史研究序説』を博士論文として提出した。論文の執筆に際しては、人文科学研究所及び所属研究グループから多くの助力をいただいた。九州という地にあるが、今後とも同志社の歴史に共感を持つ一人

として、CS研究会に期待しつつ関わっていきたい。

(西南学院大学教授)

留岡幸助と人間福祉

住 谷 馨

人文科学研究所の第一研究に「留岡幸助研究会」が設置されたのは一九七四年四月である。研究会の目的は留岡幸助全集を編纂することであった。人文研が収集していた留岡の「人道」を中心に留岡の全業績を整理編纂することであった。その経緯は一九八九年三月の「キリスト教社会問題研究—杉井六郎教授退職記念号」に「留岡幸助著作集編纂と同和問題」という私の小論に詳しく述べているので触れないが、当時の研究会の有力メンバー十人のうち三名が亡くなっている。それは第一巻の編者中条明子、第二巻の守屋茂と村山幸輝の三名である。中条明子は、この著作集が完成する前に亡くなり、守屋茂は老衰で、村山幸輝は癌で研究生活半ばで倒れた。

全集計画は、あまりにも膨大なので出版社がなく、同志社としては「人道」を中心とした「著作集」として同朋舎から出版された。全集計画には留岡幸助が書き残された「日記と手帖」全三一八冊があり、幸助の四男清男氏が、

その文章をすべて原稿に十年がかりで書き直されたことが契機となった。この全集を企図され、同志社でその作業を希望されたのは守屋茂で、たまたま、龍谷大学の教授控室で私と出会い、二人の間にその計画が進み、同志社で研究会のメンバーが結成された。全集計画から全五巻の著作集に変更した事情は清男氏も心よく諒解され、「日記と手帖」の方は北海道で研究会がつくられて編纂し、東京の「矯正協会」から全五巻として出版された。「著作集」五巻と併せて全十巻の立派な本が遺されている。「日記と手帖」の原物は当研究会が北海道の家庭学校まで出向いてマイクロフィルムにおさめた。著作集に熱中していたメンバーはそれぞれの分野で研究業績も挙げているが、同志三名の他界は著作集とともに思い出され、心に刻まれている。

私は同志社の定年前三年に退職し、滋賀県の八日市市にある滋賀文化短期大学に「人間福祉学科」を創設した。この「人間福祉」という概念は新しいものであったが、幸助の著作集を編纂しながら、この明治のキリスト教社会事業の先駆者の信仰と理論・実践は社会事業にはちがいないが、その奥底に流れるものは人間への愛とヒューマンサービスであることを痛感した。当時の囚人を空知の集治監で牧会

し、三百人余の四人と一人々々面談して、その犯罪の原因を究明するという姿勢は今日のケースワークと同じであり、四人の更生に大きな励みと力を与えている。なお、刑余者にたいして、仕事がない時は自分の家を訪ねるようにいつて、四人も五人も自宅に宿泊させている。近くに住居のあった内村鑑三は、「留岡さんは家族があるのに刑余者を多勢泊めている」といつて驚いたそうである。留岡には十二人の子どもがあつた。また、留岡が東京に家庭学校を開設し（明治三十二年九月）、北海道の社名淵に一〇五〇町歩の土地を払下げられ、今日も経統している北海道家庭学校を建設したのは大正二年十一月で、自然のなかでの不良少年（いまの非行少年）の教育を開始し、児童期における自然と健全な家庭の必要を実験した。児童を十人単位の家庭寮に入れて、寮父母のしつけと教育、農作業、牧畜など、自然と共に生活する感情を養育した。この教育観は、自然教育の主張者ジャンジャック・ルソーとスイスの家庭教育の先駆者ペスタロッチの理論と実践から学んでいる。留岡は自然の美しさと厳しさを体得できる社名淵（いまの遠軽）に宏大な土地・森林を求め、東京から遙か彼方の未開であつた北海道に家庭学校を創設した。これは少年の非行

からの脱却・矯正ではなく、新しい人間づくりであり、人間の幸せを自然とともに心身をつくりあげる教育である。

留岡は生涯の信仰を教会生活のなかから人間の再生を願っている。この自然教育は教育者自から体得するものであり、同時に児童の生育にとつて自然な感性から健全な人間の成長が期待された。留岡は「人生は五十から」といふ切つて自から未開の森林を切り開き家庭学校を建設した。その意図は壮大であり、熱意溢れるものである。大正の識者は徳富蘇峰・牧野英一など、遠路遠しとせずに家庭学校を訪れている。この留岡の人間愛の思想は社会事業として継承されたが戦争中は返り見られず、戦後、社会福祉事業として北海道の家庭は教護院の典型となり、教護院は自然環境が重視された。しかし、社会福祉事業が体制化されるとともに戦後五十五年の歴史の歩みは公的扶助とともに官僚化し、社会福祉は人間性を喪失してきた。私は社会福祉の前提に人間福祉の存在が認識される必要を痛感し、留岡研究の刺激から人間福祉を思い立ち、八日市市の短大に「人間福祉学科」を創設した。この学科には介護福祉専攻・人間福祉専攻・児童福祉専攻がある。この八年間、順調な歩みをみているが、私は留岡精神と同志社精神をもつてこの学園に対応している。

はじめにパトスありき

竹 中 正 夫

一九五八年三月『基督教社会問題研究』誌の創刊号が発行され、五十号となる。感慨深いものがある。

はじめは、ほんの小さな出発であった。一九五六年二月、十数名の学内の有志が集って、近代日本におけるキリスト教と社会についての共同研究をすることになった。最初の会合では、オーバーを着て、ダルマ・ストーブを囲んで、各自カードを検索しながら、文献リストを作成したことを覚えていいる。文部省に機関研究（三〇〇万円）の申請をするためであった。その間、大学から二〇万円の借金をした。場所は、現在の図書館のところにあったプレハブの一室であった。人文科学研究所に正式に編入されたのは、一九五九年であり、それまでは、自発的な研究会にすぎなかった。のちに、ハーバード燕京研究所から、一九五九年から、一五年にわたって、総額四、四四五万円に及び研究助成を受けたが、その基盤にあったものは、この研究を借金をしてでも始めようとした初期の自発的グループのパトスであ

った。金があり、組織があつての出発でなく、はじめにパトスありきであった。

それは、近代日本におけるキリスト教を社会についての研究は、同志社が共同してあたるべきであるという使命感であった。当時学長であった大下角一は、創刊号の「創刊のことば」で「明治初期の変革期において、多くの貢献をした人物も既に去り、彼等の残した色々な資料を今日蒐集しておかなければ、その多くが遺失することを恐れ、この蒐集を吾吾同志社こそ最もえに当るべきであると信じ」とその信念を表明している。はじめに、パトスありきである。

（同志社大学名誉教授）

史料の山の饗宴とは？

田 中 真 人

史料の山というごちそうを食卓の中央に積み上げ、研究会メンバーと一緒に食してその味や栄養分析結果を披露しあう——CS研究会の伝統的スタイルはこのようなものとは私は考えてきた。史料はあるときは『人道』『ときのこと』『石井十次日記』であり、あるときは『七一雑報』『六合雑誌』『新人』であり、また別のときには『新島襄全集』であつたりした。そして共同研究が、たんに個人プレイの総和に留まることを戒め、集団作業でしかできない作風を模索し、そのなかにこの研究会の研究方法の独自性を見いだそうとした。少なくとも私はそのように理解し、その伝統を維持しようと努めてきた。

このスタイルはとにかくにも墨守されてきたと自負する。そのためにはメンバーが関心を有する分担課題を一度分解無視して、史料の全体像を共有するための基礎作業に全員が従事するといったこともしばしば行われた。『石井十次日誌』の分析を年次別に分担し、そのデータを全体で

蓄積するという基礎作業に、六年間の研究期間の大半を費消した石井十次の研究の時などは、その極端な例といえよう。

しかしこの作風はしばしば研究会参加者になりに過酷な史料分析のための作業を強いた。とくに基礎作業段階ではみずからの作業の有する意味を見通せないことが少なくないこともあり、作業に相当な苦痛を感じたメンバーも少なくなかったのではないだろうか。その苦痛を上回る充実感と達成感は必ず得られる保証が約束されているわけではないなかで、手弁当で参加していただいた参加メンバー諸氏には、あらためて敬意と感謝の念を表明したい。

一九九四年に発行した『人文科学研究所の五〇年』で森川真規雄文学部教授（社会学）は、「海外移民と日本人キリスト教会」の研究会に参加し始めた当時のことを回想しているが、「それぞれの発表は同志社研究およびキリスト教研究の厚い蓄積を前提にした詳細な事例研究」という「キリスト教・近代史・同志社」を基調とした、やや trivialism を感じさせるもので、社会学・人類学を専攻する自分にとっては別世界であり、かつ違和感の強いものであったと述べている。『キリスト教・近代史・同志社』が

持つ求心性は今後もCSの最良の部分であり続けるだろうが、それが自己適及的にならないためには一方で何らかの『遠心的』部分を許容していくことが必要であろう』とこの文章を結んでいる。森川氏のこの小文のタイトルは『『周辺的存在者』とCSとのかかわり』とあった。みずからをCSの伝統的スタイルからは周辺の・遠心的存在とし、そうした部分をも包摂できるスタイルを採用していくことがCSにできるかと課題を与えたわけである。

その後のCS研究会において明確なことは、「キリスト教・近代史・同志社」を基調とする実証的分析手法は墨守され、あるいは墨守しようと思図されていること、そして研究会結集力の減退、とくに若い研究会参加者を容易に得られないことである。新しい研究会参加者を得るのが難しいことは、CSだけでなくどの共同研究でも見られることであり、CSの研究スタイルに関連づけてこの問題を考えるのは速断に過ぎるかもしれない。しかしこの四〇年間、専任研究員がおおむね歴史学出身であったこの研究会の手法が、世代交代を迫られていることもはっきり予感できる。考えてみれば同一研究会が同一の手法で半世紀近くも継続することのほう奇異な現象かもしれない。

思い出二つ

辻野 功

一九五八年同志社大学三年生のとき、同志社大学学友会副委員長と京都府学連副委員長を勤め、四年生の一九五九年は安保闘争に明け暮れた私は、日本の社会主義運動を始源から研究してみたい欲求にかられ、大学院に入学して初期社会主義運動の研究にとりくんだ。そんな私にキリスト教社会主義者へ関心を向けてくれたのは、恩師岡本清一先生だった。岡本先生は同志社創立九〇周年を記念した和田洋一先生編の『同志社の思想家たち』（同志社大学生活協同組合出版部）に「安部磯雄・山川均―同志社の生んだ社会主義たち」を執筆する機会を作って下さった。この仕事は、キリスト教社会問題研究会に入れていただくきっかけともなった。

キリスト教社会問題研究会では安部磯雄、村井知至、片山潜、石川三四郎らのキリスト教社会主義者を研究して、論文を発表した。そしてその過程で、忘れがたい思い出を作った。

私の提案で、『六合雑誌』の総合的研究の一環として、

一九七七年一〇月二二日、安部磯雄のご子息安部民雄氏と村井知至のご子息村井勇吾氏をお迎えして、「父を語る」とのテーマのもとに、いろいろ興味あるお話をしていただいた。半世紀ぶりに会われた幼友達である安部民雄・村井

勇吾両先生のお話は、「父は同志社を、新島先生をどう話していたか」、「家庭での父はどうであつたか」から始まって、我々に興味あることばかりであつた。安部磯雄が同志社総長就任を断つた経緯とか、村井知至がストラットフォード・アポン・エイヴォンのシェイクスピア博物館の訪問者名簿にみえる最初の日本人であり、それは漱石の博物館訪問に先立つこと一年であるとの秘話も紹介された。

さらに後に村井勇吾先生が転居される時には、村井知至・勇吾先生二代が愛用された書架を「父を研究されている辻野さんにもらつて欲しい」と、譲つて下さった。

安部に村井それに岸本能武太は同志社の同級生で、「三幅対といわれた」程の親友であつた。その中の村井と安部が中心になつて結成し、後に岸本も加わつた社会主義研究会こそが、日本の社会主義運動の始まりであることを私が明らかにできたのは、キリスト教社会問題研究会での研究

の成果である。

従来は山路愛山の次のような回想（「現時の社会問題及び社会主義者」）をもとに、社会問題研究会↓社会主義研究会↓社会主義協会↓社会民主党という図式が疑いもなく受け入れられていた。

社会問題に対する世人の感覚稍や鋭敏なりし明治三〇年（一八九七年）に至て社会問題研究会起り……始めて社会主義及び社会問題なるものゝ日本には既に実在するの事実を示しぬ。

社会問題研究会は当時会員名簿に二〇〇名の紳士を数え、毎月一回新橋新肴町の開化亭に会合し、会毎に三〇名位の来会者あり。中村太八郎氏、樽井藤吉氏、西村玄道氏を幹事とし、各種の方面に会員を募りたり。（中略）

社会問題研究会は其幹事たりし中村太八郎氏が郷里の選挙問題に依り久しく獄中の人となり、樽井氏は帰国し、西村玄道氏は死亡したりしが爲めに、会員の間を斡旋し集会を維持するもの無く、一年有余にして自ら滅亡の状に陥り、（中略）

さりながら一たび覺めたる人心は長く眠る能はず。明治

三一年（一八九八年）の暮れなりしか若くは明治三二年（一八九九年）の春なりしか、時日は詳に記憶せざれども、嘗て社会問題研究会員たりし人々の中、元来同会は会員の種類余りに雑駁なりし故永続し難かりしものなれば此度は会員の範囲を狭くし稍や同臭味の人を以て一会を組織すべしとの議を決し、社会問題研究会の名に代ふるに社会主義研究会の名を以てし、三田四国町の「ゆにてりあん」会堂を借りて再び集会を開くに至れり。此会員は総計三〇名ばかりにして、世間の注意を引くこと固より社会問題研究会に如かざりしかども、其「ゆにてりあん」会堂を借りたる縁故にて、当時「ゆにてりあん」の説教者たりし安部磯雄氏、村井知至氏等を新たに其会員に加ふるを得たるは、此会に取りては新なる勢力を加へたるものなりき。

しかし私はこの図式に異を唱え、「社会主義研究会に関する一考察」（京都芸術短期大学紀要『瓜生』第七号 一九八四年十二月）において、社会問題研究会と社会主義研究会は何の組織的關係もなく、村井や安部らのユニテリアン派のクリスチャンが中心になって結成した社会主義研究会こそ日本社会主義運動の起源であると論証した。この論

文は若干の修正を加え、「社会主義運動の起源としての同志社」と改題して恩師岡本清一先生の傘寿記念論文集『デモクラシーの思想と現実』（法律文化社、一九八五年）に収めた。

拙稿では従来の説を唱えていた先輩太田雅夫氏をも批判の対象にしたのであるが、現在では彼も含めて多くの研究者が私の説を取り入れてくれるようになった。嬉しいことである。

（京都造形芸術大学名誉教授・日本文理大学教授）

共同研究にはじめて 参加させていただいた頃のこと

安田 寛

わたしが初めて人文科学研究所を訪れたのは、確か、一九九三年の一月であつたと記憶している。日記をつける習慣がないので日には確かめようがないが、訪れた宣教師文書の研究会の慣例からしてこの月の最後の金曜日だったと思われる。

この年の一〇月に函館で「洋楽史再考」洋楽発祥の地としての函館」というセミナーが音楽図書館協議会によって催された。セミナーの最終日は函館の観光に当てられていて、新島襄渡航の碑も観光コースに織り込まれていた。その碑を仰いだとき、わたしの脳裏に突然ある考えが浮かんだ。日本に唱歌を伝えた文部省お雇い教師メーソンと新島とはどこかで出会っている、と碑から啓示を受けた。

その時、近くにいた人からは軽く一笑にふされた。しかし、わたしにはこのことが気になってしかたなく、それまで親しくしていただいた神戸女学院史料室の若山晴子先生

に連れられて、第2研究A班の世話役をしておられた吉田亮先生の研究室におじゃましたのであつた。

自己紹介が終わつた直後のことであつた。本井康博先生が入つてこられた。「これがあの本井先生か」とおそろおそろ仰ぎ見た。先生の博覧強記ぶりは噂にきいていたので、何となく恐ろしい人のように思っていたのである。

「メーソンと新島とはどこかで出会っていると思うのです」とおそろおそろ訊いてみた。後で知つたのであるが、本井先生は音楽にも関心があり、日頃から、音楽関係についても気に留めておられたということが幸いした。

「ええ、会つてますよ。新島襄全集にも出ています」とあまりにあつさり返事をいただいたときは、さすがに、本井先生は何か勘違いされているのではないかと失礼ながら内心思つた。それほど、それまでメーソンと新島襄を繋ぐ線はどこにもなく、見つけるのは相当に困難なことだと思ひ定めていたからである。

この後、翌年の四月二二日に、第2研究A班の世話役としていた吉田亮先生の計らいで、「唱歌とアメリカン・ボード宣教師往復書簡―宣教師L・W・メーソン4教派合同派遣問題の経緯を中心に―」を発表させていただいた。

この後、幸運にも人文科学研究所の社外嘱託研究員の身分をいただき、研究会に参加させていただけることになった。

この年の一二月には、人文科学研究所恒例の総会に出席させていただき、新人だから自己紹介を兼ねてということで、第2研究A班の挨拶をさせられた。

内村鑑三の有名な自伝にある、彼がミツシヨン・ショーと皮肉を込めて呼んだある宣教師大会を見物して、改心した異教徒をサーカスの興行師が飼い慣らした犀に喩えた話をした。

人文科学研究所の総会にいて、しかも挨拶をしているまるで場違いな自分が内村の言う「犀」のように思えたからである。

書物を通してしか知り得なかった綺羅星のごとく居並ぶ研究者の一人が、「輸血が必要なのです」と慰めてくださった。

自然科学と比べて、人文科学の共同研究はいかにも難しいと思えるし、研究の方法、性質からして、かならずしも共同研究が必要だとは思えない面もある。

しかし、それだからこそ、人文科学研究所の社外者まで

も含めた懐の深い共同研究体制はじつに貴重なもので、しかもその成果を着実にあげ絶えず世に公表していることは信じがたいくらいのものである。

人文科学研究所が研究能力を飛躍的に高めたのは、元駐日大使として有名な日本学研究者ライシャワーとハーバード大学燕京研究所が大いに関係している、と知った。同志社大学人文科学研究所がまだ研究予算が少なく蔵書もあまりない頃、燕京研究所に援助を求めたのは、神学部教授で研究所長をつとめたことのある竹中正夫氏だったという。

彼によれば、所長のエリセフは、

「わたしたちの研究テーマにほとんど関心を示さなかった」

という。

つぎに彼が会ったのがライシャワーであった。

竹中氏の思い出を読むと、ライシャワーは次のように言っていたかと思える。

「わたしは、あなたがたの希望をかなえてあげることが出来ると思います。日本では、宣教師が残した功績について、ほとんど理解がされてません。宣教師は、たとえば、医療、福祉、教育、とくに女子教育の分野では、近代日本

が出来上がるときにとっても重要な働きをしました。これはぜひ研究される価値があります」

一五年間で総額四四五万の援助とそれに託したライシヤワの願いは、今、確実に実を結んでいると思う。

(奈良教育大学教授)

キリスト教社会問題研究会と トランスナショナルな歴史観

安 武 留 美

私が「キリスト教社会問題研究」に出会ったのは十年程前、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の図書館でした。アメリカで生まれ育った人々と席を並べてアメリカ史を専攻するハンディーを痛感し、論文は、日本語の一・二次文献が使えてしかもアメリカ史の枠に入りそうなトピックを探そうと決めた時でした。「キリスト教社会問題研究」の中には、日本人社会で活躍したアメリカ人ミッシヨナリーとその教え子達や、日本人移民社会で同胞の指導にあたった日本人教役者の研究等が多々ありました。これらの論文は、日米のクリスチャンを中心とするネットワークが日米の歴史、特に社会史の分野において重要な研究対象であることを示唆してくれるものでした。

最近、日米において一国また一地域を扱ってきた従来の歴史観に対して国や地域の境にとらわれないトランスナショナルな歴史観の重要性が説かれるようになってきていま

すが、キリスト教社会問題研究会の会員の方々は、国境を越えて異文化間交流に従事した先駆者達を研究対象としてこれ、もう半世紀もトランスナショナルな歴史分野また歴史観を開拓されてこれたと思います。

アメリカ史の分野でもやっとトランスナショナルな視点が重要視されるように、プロテスタント・ミッショナリーのネットワークを軸に世界に広がったアメリカ起源の Woman's Christian Temperance Union (WCTU、日本支部は日本キリスト教婦人矯風会として知られる) の日本またカリフォルニア日本人移民社会での社会改革運動に関する私の研究成果は、アメリカ史専攻の論文として学位を受けることができました。最近、この論文を本として出版できるようにアメリカ人女性プロテスタント・ミッショナリーとその日本人の教え子達の活動を日本の国民国家形成過程の文脈の中で理解することを試んでいます。また、時代を戦間期に移して、日本人の WCTU・YWCA のメンバーも参加した汎太平洋婦人会議 (Pan Pacific Women's Conference、PPWC) の研究も最近始めました。カリフォルニア在住のため、研究会に参加させていただけの機会になかなか巡り合うことができませんが、3つ

の部会の研究課題と成果にはいつも様々な示唆を受けています。

今後とも益々すばらしい研究をなさいますよう期待していますとともに、近いうちに私も何か貢献できるようになればと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

(カリフォルニア大学レクチャラー)